

ヘルマン・ヘッセの職人観にみる自律と共生 —ドイツ地域力の考察

〈はじめに〉

1877年に生まれ1962年死去に至るまで、二つの世紀を生きたヘルマン・ヘッセ (Hermann Hesse) は二度の世界大戦を経験し激動の時代を生きた、現代ドイツ文学を代表する作家の一人である。1946年ヘッセ69歳の時に、約10年の歳月を掛けて完成させた『ガラス玉遊戯』(1943)にて「ノーベル文学賞」を受賞。その他にも同年、フランクフルト市の「ゲーテ賞」、少し前に遡る1936年59歳の年に「ゴットフリート・ケラー賞」を、又1950年73歳の年には「ヴィルヘルム・ラーベ賞」、そして1955年78歳の年には西ドイツ出版社協会の「平和賞(ドイツ・ブックトレード平和賞)」など数々の賞を受賞するも、その生涯は都会の喧騒から離れ自然をこよなく愛し、庭仕事を趣味とするなど日々の生活は質素なものであったとされる¹。また、彼の作品には自然や田舎など地域を背景にしたものが目立ち、とりわけその中で素朴に生きる人々の様子を生き生きと描いたものが多い。しかも、今の時代においても古さを感じさせず、現代人に多くの示唆を与えるヘッセの作品は、未だ世界中に多くの愛読者を持つ。依然、人々の心を引き付けて止まない彼の諸作品には文学的な魅力も然る事ながら、現代の我々が抱える問題に対処する為の手がかりも多く含まれているのではないかと思われる。中でも特に、彼の作品に度々みられる職人についての描写やヘッセ自身の持つ職人観を通して、ドイツの地域運営において重要な役割を担ってきた職人達に焦点を当てて、地域に秘められた潜在力について探ってみる。

〈I〉 ヘッセ文学と職人

ヘッセの作品には、職人が登場するものが少なくない。ヘッセが青年期までを過ごした19世紀のドイツでは、手工業職人の遍歴修業の伝統がまだ残っており、彼の作品の『クヌルプ』(1915)には典型的な遍歴職人の主人公が登場する。

このような遍歴は当時の職人にとっての修行つまり職業訓練の一環、または就労システムとなっていた。特にドイツ文学では遍歴の伝統を小説に取り入れ、主人公の成長過程を描いたものが多い。例えば代表的な作品としてはゲーテ (Johann

¹ Hermann Hesse Page Japan 「ヘッセの生涯と作品」 pp.1-3 (巻末文献一覧参照)

Wolfgang von Goethe 1749-1832) の『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(1795-96) や『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(1821)、ヘッセの『ペーター・カーメンツィント(郷愁)』(1904)、『ガラス玉遊戯』(1943)、トーマス・マン(Thomas Mann 1875-1955) の『魔の山』(1924) 等、これらは主人公が遍歴の旅を通して人生経験を積み、精神的に成長する様を描いたもので、このような小説を「教養小説」Bildungsroman (ビルドゥングスローマン) という。これはドイツ語の「人格形成」にあたる Bildung (ビルドゥング) が語源であり、18世紀の古典主義に始まり、同時期を代表するゲーテの作品を手本に、その後も文学の一形態として伝統的に受け継がれてきた²。ヘッセは職人遍歴の経験はないが、1894年6月(16歳)からカルプの町工場(ペロット塔時計工場)³で機械工の見習いとして約1年3ヶ月間働いたことがあり、この時の体験がその後の彼の多くの作品に生かされている。細井氏の分析を基に以下に分類する⁴。

(1) 仕事場における職人の日常を描写したもの

『ペーター・カーメンツィント(郷愁)』(1904)、『機械工場から』(1904)、
『機械工職人』(1905)、『ある発明家』(1905)、『初めてのアバンチュール』
(1905)、『車輪の下』(1906)、『ハンス・ディーアラムの見習期間』(1909)、
『大旋風』(1913)

(2) 遍歴職人に焦点をあてたもの

『クヴォールムの物語』(1904)、『ペーター・バスティアンの青春』(1902)、
『クヌルプ』(1915)

(3) 中世の職人の世界を取り上げたもの

『ナルツィスとゴルトムント』(1930)

(4) 職人の引退後の生活を書いたもの

『昔の<太陽>で』(1904)

(5) ツunft(手工業組合)を取り上げたもの

『小さな町で』(1906/07)

現在邦訳されている作品に於けるこれらの分類から、ヘッセの作品には職人の遍歴のみならず、職人の日常の様子や、中世まで遡った時代の職人の姿を扱った作品が少なくないことが分かる。職人の設定は主人公以外にも、主人公をとりまく地域の住人や、友人、知人などにも及ぶ。そしてヘッセの生きた時代も反映し、僅かで

² 浜本 p.98

³ Hermann Hesse Page Japan 「ヘッセの生涯と作品」 p.1 (巻末文献一覧参照)

⁴ 細井 p.203

はあるが資本主義的工場や工場労働者を取り上げたものもある。

ヘッセは詩作や執筆の道をどうしても諦めることができなかつた為、短期間で見習工に見切りをつけてしまったが、これだけ多くの職人を作品に登場させたことは、単に職種が小説の題材として適していたという理由だけではなく、ヘッセの心中に職人に対する関心や憧れ、又は愛着があったと考えられる。

十九世紀末の南ドイツのこの地方小都市では、ローブ製造職人、大型皮革製品製造職人、石切職人、鋏砥（はさみとぎ）職人、石鹼製造職人、籠網み職人、帽子職人、桶樽職人、ブリキ職人、荷馬車の御者、井戸掘り職人、日雇い労働者、路地清掃人、行商人などあらゆる職業の人たちがまだその手職によって生活しており、ヘッセは少年時代からこれらの人々に愛着を感じていた。⁵

と田中裕氏も述べている。

また、田舎の人々の暮らしや自然をこよなく愛するヘッセが、産業主義（資本主義的工業が国の経済の中心を占める）により発達した都市文明に対して、反発を抱いていたことも根本にある。その産業主義に抗って、伝統の技や習慣を守りながら地域に根差して必死に生き残ろうとした職人達は、否応なしに時代の流れと共に資本主義的工業化の波に吞まれていくことになる。そして凶らずも、青年期にこのような転換期に立ち会うことになり、愛着を持っていたこれらの友人たちと以上の点において少なからず同じ価値観を共有していたと思われるヘッセも、伝統的な職人文化の衰退に対し他人事とは思えない危機感を持っていたことが彼の作品や手記からも読み取れるのである。

このような視点で描かれたヘッセの作品には、一本立ちしながらも懸命に生き抜こうとする遍歴職人のけなげな姿や、素朴で信仰心あふれる職人達の間像が垣間見える。しかも、他の社会的検証からも、彼の作品に描かれているような中世から信仰を中心に職人と地域の人々とが繋がりをもって共生してきた、過去を通じてドイツが脈々と築きあげてきた伝統が、現在も地域のコミュニティを中心に営まれているドイツの社会生活の基盤になっていることは注目に値する。

以上のことは、歴史や経済、社会学など地域コミュニティの形成に関する他分野の学問的観点からも検証可能であり、本論文中においても複数の論考を提示して検証する。

⁵ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第5巻）』 p.367、（ ）内は本論文著者による。

〈Ⅱ〉 都会文明とヘッセー 産業革命

〈Ⅰ〉で述べたように、ヘッセが産業主義による都市文明に反発し、田舎や自然を熱愛するのには彼が生きていた時代背景の影響もある。都市文明の発達は産業革命に始まるのであるが、ヘッセの時代はこの産業革命の真只中に当たる。

18世紀イギリスの繊維産業（従来の毛織物ではなく新興の木綿製品が主流となる）に関連する織布、紡績機械の発明に端を発する産業革命は、それまでの手工業に代り、生産工程の機械化による工場制度を確立することで大量生産を可能にする。それに加えて1781年ワット（James Watt 1736-1819）による蒸気機関の完成は工場の動力源としてのみならず交通革命をも促し、イギリス国内の鉄道網の整備拡張は1830年代に始まり、1850年頃迄には国内網がほぼ完成する。1838年にはイギリス汽船が大西洋横断に成功し、大洋航行の蒸気船時代が幕を開ける。これらの過程を経て産業革命の流れは以後欧州全体へと広がっていくのである。⁶

以上の軽工業を中心に石炭をエネルギー源とする発展を第一次産業革命と位置付けると、第二次産業革命は同じくヨーロッパで19世紀後半～20世紀に起こり、重工業と電気・化学工業を中心に、電気と石油を動力源として発展する。そして、資本主義的工業が国の経済活動の中心を占めるようになり、産業主義（Industrialism インダストリアリズム）が台頭する。しかも工業都市化に伴う人口増加の深刻な食糧問題は、その後の農業技術の発展も促す。⁷

しかし、アメリカ南北戦争終結と、ビスマルク（Otto Eduard Leopold Fürst von Bismarck-Schönhausen 1815-98）によるドイツ統一（1871年ドイツ帝国となる）後の1873年からヨーロッパや北米に深刻な影響を及ぼした不況（1895年頃迄）は、産業革命の波に乗り始めていたドイツの工業に打撃を与え⁸、更に1876年以後には農業恐慌も追討ちをかける⁹。その為、これらの深刻な不況対策としてドイツ帝国は1879年に保護関税法を施行し、他国からの輸入品に高い関税をかけて自国の農業と工業を保護しようとする¹⁰。その結果、農業への効果は努力の甲斐なく衰退の一途を辿るものの、工業（特に重化学工業）は世界的に大躍進し、当時の先進工業国であったイギリスやアメリカをも凌ぐようになる。国内の社会勢力は、ビスマルクの時代まで、経済的には弱いが政治的に権力を増す農業ユンカー（領主貴族）階級と、経済的には強いが権力が衰退する工業ブルジョア階級に二分されていく¹¹。このよ

⁶ 米田ほか pp.91-94

⁷ 同上 pp.141-42

⁸ 森岡ほか著、小川ほか改訂 p.192

⁹ 米田ほか p.147

¹⁰ 森岡ほか著、小川ほか改訂 p.192

¹¹ 米田ほか p.147

うに欧米諸国では第二次産業革命により産業資本主義が台頭し、国際社会に帝国主義をもたらすのであるが、当然ながらドイツもその流れに巻き込まれていくのである¹²。

ヘッセはこの第二次産業革命の只中に生を受け、様変わりする社会と、都市が文明によって変貌して行く姿を目の当たりにしていたものと思われる。特に作品の中でも『荒野の狼』（1927）や『ペーター・カーメンツィント』には都会文明の発達や物質文明（工場制による大量生産）がもたらす混乱と頹廢についてのヘッセの危惧が切々と込められている。田中裕氏が次に述べているように、

彼は常にこれら底辺の人々（手職によって生活する人々）の側に立って作品を書いているが、それは抑圧されている人々への思いやりからで、政治的な階級意識からプロレタリアートの側に立っているわけではない。時代の進歩につれてやがて衰退し消滅するであろう儂さを予感し、二度と取り戻せない世界を作品中に留めおこうという意識が感じられる。¹³

それまで自然と共生しながら営まれてきた人間的な生活や、代々歴史を通じて継承されてきた職人文化が、産業主義や国家政策により衰退して行く様を憂いながら、ヘッセは作品の執筆を通して故国ドイツの本来の価値ある生活文化を後世へと伝えるべく、特にドイツの歴史上重要な役割を担ってきた職人の文化そのものの伝承の必要性を感じていたのである。

〈Ⅲ〉 ドイツの職人の歴史

< 中世 >

8世紀末～9世紀にヨーロッパで起きた「カロリング・ルネサンス」は、「12世紀ルネサンス」（ギリシア・ローマの古典文化がビザンチンの東ローマ帝国によりヨーロッパに伝えられる）や13世紀末に起こる「イタリア・ルネサンス」に先駆けて、ヨーロッパ文明の発展に大きな影響を与えたといわれている。これはカロリング朝フランク王国の皇帝シャルルマーニュ（Charlemagne 742-814、在位 768-814）の主導により、教会（キリスト教）を中心としたヨーロッパの統合を試みたものであり、古典文化の復興を目的として教育（ラテン語）や文化、政治に至るまで、イタ

¹² 米田ほか pp.153-54

¹³ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第5巻）』p.367、（ ）内は本論文著者による。

リア・ルネサンスをも凌ぐと言われている¹⁴。

そして、封建制により政治的秩序を回復し、荘園に残っていた奴隷も8世紀頃から(11世紀までに)解放され¹⁵、人口増加が始まる。食料需要も増え、修道院を中心として農業改革(三圃制による輪作の導入、鉄製の農機具や有輪重量犁の普及、蹄鉄やあぶみ等の馬具の改良等)が行われる。それは後に、「中世西ヨーロッパ最大の農業革新」¹⁶と呼ばれ、それに伴い手工業や商業の発達、そして貨幣の流通も起り、地域の交易を活性化させ、都市を発展させる。

12～13世紀にはフランスのシトー修道会(ベネディクト派)を中心に水車や風車、冶金、製鉄技術などの機械技術も導入し、更なる都市化を促す。又、技術の発展は、領主やその従者である職人、修道士や商人、生産者たちを互いに結び付け(人と人との繋がりが広がる)、産業や経済の循環を向上させた。この「中世の産業革命」¹⁷こそ、18世紀イギリスを起点とした産業革命の先駆けであり、その後の職人の社会的地位を大きく向上させるのである。¹⁸

中世初期には聖職者と貴族が社会の主要階層であったが、都市の成立によってそれまで蔑まれていた商人や職人(指物師、仕立て職人、靴職人等々)が、一市民としての身分を確立する¹⁹。そこで自分達の身分保証をより強固なものにする為に、教会に守護聖人を祀って自らの職種を聖別化し²⁰、この時代に頻繁に流行したペスト(黒死病)などの疫病²¹や災害から自分達の生活を守る為、ゲルマン人の昔からの強い共同意識の下に²²、信仰を拠り所とした互助組織「兄弟団(Bruderschaft)」を結成する²³。

この兄弟団は都市の中に多数存在し、それぞれの所轄の教会に祭壇(一つの教会に複数の兄弟団がある場合、祭壇もその数だけ設置される)を持ち、仲間の死者を弔うなどの相互扶助と共に、その地域の祭りや宴会の催しの中心的役割も担っていた。中には従来の純粋な宗教的結びつきによって修道院や病院の維持などの活動のみを目的とした異業種同志の兄弟団も存在したが²⁴、都市の兄弟団の多くは、世俗的利害関係の下に各業種につくられていた²⁵。しかも、個人主義がまだ機能していない中世では、職業は即ちその者の身分を表し、その職業を代表する団体の社会的評

¹⁴ 五十嵐 p.13

¹⁵ J.ギャンペル p.87

¹⁶ L.ホワイト p.86

¹⁷ J.ギャンペル(著書タイトル)

¹⁸ 同上 p.75

¹⁹ 阿部 p.51

²⁰ 同上 p.51

²¹ 甚野ほか p.211

²² H.F.ローゼンフェルトほか p.83

²³ 甚野ほか p.211

²⁴ 阿部 p.52

²⁵ 甚野ほか p.212

価値こそが個人の身分を保障した。その為、団体独自の倫理や行動規範を細かく規定し、個人が規則に従うことをその団体への帰属の証とした²⁶。つまり「規約と倫理規範に忠実な団体的行動様式」²⁷を遵守することが「名誉」であり、「不名誉」とはそれらを逸脱することとされたのである²⁸。その後発生する「同業（者）組合（Berufsgenossenschaft）」はこの兄弟団から派生したものである。ただし例外として、靴職人で職匠歌人のハンス・ザックス（Hans Sachs 1494-1576）の生まれたニュルンベルクは市参事会の力の方が強く、兄弟団や同業組合の結成が認められなかった²⁹。その為、ツunftの代りに市参事会が諸事を仕切ったことが却って手工業を発展させたという点で、特異な例と言える³⁰。

兄弟団から派生したギルド（Gilde）は11世紀に結成された「商人ギルド」を皮切りに、その後13世紀頃に「手工業者ギルド」が発生し、やがて「ツunft（Zunft）」とも呼ばれるようになる（地域によって呼び名が異なり、南ドイツは「ツunft」で北は「Amt（Amt）」、または「ギルド」、ドイツ南東部では「インヌング（Innung）」と呼ばれることが多い）³¹。当初の手工業ツunftは、マイスターと職人の区別は特になく、信仰と道徳心がある手工業者なら誰でも加入できる兄弟団であったが、後にマイスターだけが加入を許される組織となっていく³²。手工業者（Handwerker）は親方（Meister マイスター）、職人（Geselle）、徒弟（Lehrling）の三身分からなり、マイスターは徒弟を（師匠と弟子の関係で）教育して職人に育て上げる義務（家父長的關係）を持つ³³。

ツunftは、病気や貧窮の職人仲間を共同金庫によって扶助する義務を負っていたが、その反面、管轄下の手工業を監視する権利も持ち、諸問題の独自解決権や組合員に対して優位な裁判権を持つ等、かなりの公権力を持っていた³⁴。

その厳しい状況下においても都市の市民は少しずつ領主から自治権（裁判権、行政権）を獲得していく。しかし、市民たちのそのような努力にも拘らず、その後の市参事会制度の普及により、市参事会員は名門市民が一手に独占してしまうのである。その為14～15世紀にかけては都市貴族や市民が指導する形で、更に（同時期に権力を伸ばし始めた）ツunftも巻き込んで、市参事会の閉鎖性に対して権利を要求する運動が行われ（手工業から集められた資金の使途の決算報告要求など）、こ

²⁶ 阿部 pp.56-57

²⁷ 藤田 p.12

²⁸ 同上 p.12

²⁹ 阿部 p.64

³⁰ H.F.ローゼンフェルトほか p.84

³¹ 同上 p.83

³² 高木 p.63

³³ 同上 pp.83-84

³⁴ H.F.ローゼンフェルトほか p.84

れを境に各地のツンフト闘争へと発展していくことになる。³⁵

また、同時期の都市部では次第に人口が過密化し³⁶、続く 15～16 世紀には増えるマイスターの人数とツンフトへの加入志願者数をそれぞれ一定限度に抑える為に、全国のツンフトは加入条件を大幅に引き上げる。特に 14 世紀後半にはツンフト数も激増し³⁷、それに伴うツンフト加入者の増加を抑える対策の一つとして、各ツンフトは、職人がマイスターになる為に「マイスター作品」を所轄のツンフトに提出することを義務づける。しかも審査及び資格の授与については予めマイスターの子弟を第一に優先することとし、加えて一人のマイスターが雇い入れる職人や徒弟の数も制限を設けたのである。³⁸

既に 14 世紀には親子で職業や財産を相続する世襲の権利も確立していた為、マイスターの息子や（マイスターの）娘と結婚した職人が審査で優遇されることは通例となっており、この取り決めによりツンフト・マイスターの血統以外の人やツンフトの管轄（都市）外で生まれた者はツンフトのみならず審査の段階で締め出されてしまったのである³⁹。

しかもこれに止まらず、このような厳しい条件下で職人がマイスターの資格をよつとの思いで取得しても、肝心のその後の独立が許されず、他のマイスターの下で引き続き働き続けなければならないというディレンマが発生したのである⁴⁰。

以上のように 15 世紀はツンフトが強力的な排他的制度を敷いたことにより、マイスター達は公然とこの公権力を活用し自らの保身の為に職人達を抑圧していったのである。当然、マイスター階級と職人階級間の軋轢はその後、益々高まっていくこととなる⁴¹。

しかし一方で、そのような排他的制度に対する反動として、14 世紀半ば～16 世紀には、職人達による同業者の為の組合（ツンフトと同じように兄弟団から発生）である「職人組合（Gesellenvereinigung）」が次々に結成される⁴²。この組合も会費制で、互助的機能や祭りの取り仕切りも兄弟団と変わらない。そして 15 世紀前半には各地に集会所がつくられ、遍歴職人用の宿としても使用されると同時に（遍歴職人達の）職業斡旋（「職人斡旋の権利」⁴³の行使）も行われた。これら職人組合の団結は次第にツンフトに対する交渉力を強めるまでになり、賃上げ要求の実施に

³⁵ H.F.ローゼンフェルトほか pp.88-90

³⁶ 藤田 p.193

³⁷ H.F.ローゼンフェルトほか p.85

³⁸ 高木 p.85

³⁹ 同上 p.85

⁴⁰ 同上 p.85

⁴¹ 同上 pp.84-85

⁴² 同上 p.86

⁴³ 藤田 p.170

及ぶ。しかし、これらは単なる世俗的要求に止まらず、職人達それぞれが「職人の栄誉 (Ehre)」を維持する為の社会的諸条件を獲得することが、彼らの真の目的であったと言える⁴⁴。

また、このような職人組合の存在意義は他にもある。前述のように中世社会で人々は何かしらの仲間組織に加わるのが当たり前で、どの仲間や組織にも全く属さずに生活することは当時としては考えられないことであった。しかも、手工業者の「栄誉 (名誉)」の条件としては共同体地域に定住することが前提となっており、且つその地域共同体にただ依存、従属するだけでなく自分の力で独立して職業を営むことが重要とされた⁴⁵。これらの状況下において、マイスターから締め出された職人が必要に迫られて自分達の独立を可能とする共同体を自ら結成するのは自然な流れであったといえる。しかも、職人にとっての仲間組織は、互い (成員同志) の技術向上の為の情報提供や、後輩たちに教育の場を提供するなどの役割を担うものとしての意義も大きかった⁴⁶。

加えてこれらの職人同盟の成立には、騎士や聖職者の団体、修道院の後ろ楯があったことは大きい。特に聖職者たちは墓地、祭壇、合唱団を職人達に提供し、その見返りとして職人に対し、教会への奉仕と寄進を期待したのである。しかも、当のマイスターたちも、教会等が職人の世話をしてくれれば自分達の経済的負担が軽減することからこの動きに反対しなかったことも幸いし、教会と職人の接近は比較的スムーズに行われた。⁴⁷

これら複数の条件が重なり、その後も職人組合の結成は加速し、更に職人達の団結は人口過密都市の外側へどんどん広がることになるのである。

その際、職人組合の都市外への広がりをもつたもう一つの要因となるのが、遍歴職人の存在である。職人の遍歴 (Wandern) 制度は 14 世紀に形を成し⁴⁸、16~17 世紀にはドイツ手工業全体に広がるが、これについては 15~16 世紀以降にツングトの飽和状態に対処する為に、職人追放の手段として遍歴制度 (義務) を利用したことが遍歴の慣習を広める一因になったとも言われている⁴⁹。

特にここで重要なのは、この慣習は他のヨーロッパ諸国と比較してもドイツで顕著に広まり、義務化 (一部を除いて国内殆どの地域) されたのもドイツのみであったということである。これについては、他の国においてこの慣習が全く無かった訳ではなかったが、イギリスやフランスの例をみても、ドイツに比べて遍歴が必要と

⁴⁴ 高木 pp.66-69

⁴⁵ 藤田 pp.64-66

⁴⁶ 高木 p.86

⁴⁷ 同上 pp.86-87

⁴⁸ 同上 p.45

⁴⁹ 藤田 pp.146-47

される程の切実な状況（職人、親方の人数の飽和状況）には至っていなかったことと、親方（マイスター）になるのにドイツほど困難さを伴わず、比較的スムーズに資格を得ることができたことが理由として挙げられる。⁵⁰

一般には未婚の職人が3～5年「強制遍歴」に服し、経路については自由に決めることができた⁵¹。特に、ドイツは最も有効な修業の場として全ヨーロッパ（例えばポーランド、スウェーデン、フランス、イギリス等）から職人が遍歴修業に訪れている。このことから、ツンフトは領邦内での地域的な繋がりだったのに対して、職人達は遍歴修業を通して地域を超えた（帝国全体のみならず、国外にも広がる）ネットワークを築いたといえる⁵²。

ドイツの職人組合の加入儀礼については、ツンフトのそれと異なり（フランスやイギリスとも異なり）、キリスト教の影響は（理由は不明とされる）殆どみられない⁵³。しかしその代りに中心となるのが「遍歴」の習慣それ自体である。職人組合の入会儀式に登場するのは、あらゆる職種で共通の「職人の箱」であり、儀式中に多くの時間を割いて語られるのは「遍歴」の話である。つまり、この職人の箱は儀礼が行われる場の浄化に使われ、遍歴の話は修業の苦難と守るべき規範が中心となる。このことから理解できるのは「遍歴」の習慣は、職人の精神的自律の為の通過儀礼であり、同時に職人達にとっての「名誉」、すなわち「遍歴」を経験すること自体が職人にとってのアイデンティティ（存在証明）を表すものとなり得るということである。⁵⁴ つまり、職人組合は遍歴職人による遍歴職人の為の組織であり、そのため元々定住職人が多い地域ではツンフトとの従属関係が継続し、職人組合の結成が進まなかったことから、職人組合にとって「遍歴」の習慣そのものが如何に大きな意味をもっていたか想像できるのである⁵⁵。次に藤田氏も述べるように、

〔…〕ドイツの職人組合は親方たちの組織とは異なるものに、その存在根拠、アイデンティティをみいだした。遍歴こそ、ドイツの「古き手工業」における職人と職人組合のアイデンティティであり、「職人の名誉」の核心をなしたといふべきである。⁵⁶

ドイツの手工業を担う職人たちにとって「遍歴」とは正に「職人の名誉（榮譽）」そのものだったのである。

⁵⁰ 藤田 pp.145-47

⁵¹ 同上 p.96、p.151

⁵² 高木 p.45

⁵³ 藤田 pp.124-27、p.139

⁵⁴ 同上 pp.138-39

⁵⁵ 同上 p.162

⁵⁶ 同上 p.139

<近世>

1517年に神聖ローマ帝国（中世から19世紀初頭のドイツ国家を指し、正称は「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」、⁵⁷大小数多の領邦から成る）では、ルネサンス期の文芸復興の兆しを背景に、奢侈に傾くカトリック教会が納付金制度の一環としてサン・ピエトロ（聖ペテロ）大聖堂の建立のための贖宥状（免罪符）を出し、これに抗議してマルティン・ルターが「九十五カ条の論題」をヴィッテンベルク城教会の扉に張り出したことに端を発した宗教改革⁵⁸（運動の中心思想はルターの福音主義＝プロテスタンティズム）が勃発する。この流れを受け1524年に、シュヴァーベン地方の富農層を中心に、農奴制の廃止や貢納の権限を要求して始まった一揆、ドイツ農民戦争（多くの職人を巻き込み⁵⁹、翌年1525年諸侯軍に鎮圧され農民側が敗北）を経て⁶⁰、1618～48年の三十年戦争（宗教改革で勢力を伸ばし始めたプロテスタント諸侯は1608年にファルツ選帝侯を盟主とする「同盟」を結成、これに対抗して、翌年カトリック諸侯はバイエルン公を盟主に「連盟」を結成して両者は対立、1618年には皇帝・カトリック連盟対、プロテスタント同盟の本戦争へと発展する。その後、諸外国が干渉仕出したため国際戦争に発展し戦況は次第に激化、最終的にブルボン・ハプスブルク両王朝の政治抗争に至る。この戦争で帝国は実質的に解体、諸外国の介入で皇帝権力は崩壊する）⁶¹の後、ウェストファリア条約により、いわゆる「ドイツ帝国の死亡証明書」⁶²が出され、神聖ローマ帝国（当時のドイツのこの名称は1806年まで続く）はオーストリアとブランデンブルク・プロイセンの二大中心国家（ブランデンブルク選帝公国と、ドイツ騎士団が建国したプロイセン公国が1618年に合併している）⁶³となる。

しかし三十年間という長い戦いによって国は三分の一の民を失い、経済的にも大打撃を受け、戦後、国の荒廃は進む。それに伴い都市の自治制度は崩れ、そこで領邦君主プロイセンの絶対主義権力（フリードリヒ・ヴィルヘルム〔大選帝侯〕、在位1640-88）が台頭し始める。そして、後の1701年には首都をベルリンとするプロイセン公国が王国に昇格し（フリードリヒ一世、在位1701-13）、フリードリヒ・ヴィルヘルム一世（「軍隊王」、在位1713-40）の時にはプロイセン絶対王政が誕生する（後に「啓蒙専制君主」フリードリヒ二世〔大王〕、在位1740-86）⁶⁴。

⁵⁷ 日本国語大辞典

⁵⁸ 森岡ほか著・小川ほか改訂 p.114

⁵⁹ 高木 p.89

⁶⁰ 米田ほか p.26

⁶¹ 同上 pp.44-46、森岡ほか著・小川ほか改訂 pp.130-33

⁶² 米田ほか p.46

⁶³ 同上 p.53

⁶⁴ 同上 pp.53-55、森岡ほか著・小川ほか改訂 p.145

こうして台頭した君主は更なる権力維持の為、自治制度そのものをも否定したことから、多くの都市が自治権を手放すこととなる。その結果、都市の議会は特権集団により独占され始め、市場も、有力な商人ギルドとツunftのマイスター以外は商業資本に支配されるようになる。これにより、自らの閉鎖性を強めて抵抗していた一般（有力ではない）のツunft・マイスターの荣誉が衰退し始めると、絶対主義国家はこの好機を逃すまいとして、それまで見逃してきたツunftの閉鎖性（寡占性）を否定し、領邦を超えて勢力を拡大しつつあったツunftの支配体制を抑えるべく、大規模な産業改革を始める。折しも 1654 年に領邦君主の政府は帝国議会の決議により独自の産業秩序をつくる権限を与えられ、ツunft制手工業に本格的に制約を加え始める。そして自ら政府主導のマニュファクチュアをつくり、民間のマニュファクチュアの助成にも乗り出す。このようなマニュファクチュアや問屋制家内工業の進出により、従来ツunft制手工業は生産分野を奪われることが多くなる（但し王城都市内の特定の手工業には例外もあった）。⁶⁵

18 世紀は職人による運動や蜂起（「名誉」を守る為の命懸けの闘争）によって「職人蜂起の時代」⁶⁶といわれる程、紛争（暴動）やストライキが多く発生した。領邦国家と帝国都市の支配層はそれ等に対する危機感から、17 世紀後半～18 世紀（既にその前から準備をしていたが）には帝国および領邦の産業立法（反職人立法など）を次々と打ち立て、遂に 1731 年には、帝国はツunft改革に踏み切る。帝国皇帝と領邦君主が共に制定した「帝国ツunft法⁶⁷（帝国手工業法令）⁶⁸」は、帝国内の勤労人民の大部分を組織的に抑圧することとなる⁶⁹。

この法令はその序文で「手工業者一般、とくに手工業下僕・子息・職人および徒弟にはびこる悪弊の除去」⁷⁰を謳っており、手工業者が自らのアイデンティティを示すものとして伝統的に守ってきた「名誉」（＝「権利」）⁷¹規範（特に賤眠の子や非嫡出子、婚前性交渉で生まれた子でないことが権利の条件であったこと等）を「悪弊」として捨て去ることを強制した⁷²。18 世紀初期には領邦君主達は今迄疎外されていた非ツunft・マイスターに次々と独立営業の許可を与える。他方で、新しい工場の出現により小規模な手工業の一部は淘汰されて行き、18 世紀末には、本格的マニュファクチュアの進出によりツunft制手工業は大きな打撃を受ける⁷³。

⁶⁵ 高木 pp.76-79

⁶⁶ 藤田 p.23

⁶⁷ 高木 p.82

⁶⁸ 藤田 p.19、p.82

⁶⁹ 高木 p.82

⁷⁰ 藤田 p.24

⁷¹ 同上 p.48

⁷² 同上 p.25

⁷³ 高木 p.80

しかもこの法令は同時に、ツンフトの国家への従属を促し、ツンフトによる市場独占を制限する為にそれまでツンフトが行ってきた価格協定を禁止し、マイスター資格の人数制限や作品提出の義務も撤廃。マイスターの称号は僅かの例外を除いて総ての志願者に与えられることとなり、マイスターが職人を人数制限なく抱えることを可能にした。このように政府はツンフトの行き過ぎた閉鎖性を是正することで、マイスターと職人の対立を緩和し蜂起を防止しようと考えたのである。⁷⁴

しかし、この法令の本来の目的は職人運動の抑制にあり、ツンフト制そのものの廃止を意図したものではなかった点に注意すべきである。この時代においても封建的秩序の一部を成していたツンフト制を廃止すれば、封建制崩壊に繋がる懸念があった為、ツンフト・マイスターの違反行為の取り締まりは極めて緩やかだった。⁷⁵しかも、帝国の法令の施行に関してはそれぞれの各領邦の判断に委ねられており、ドイツ内でも統一性がなかった為に職人蜂起はその後 1800 年まで減少することはなかった⁷⁶。

一方で職人に対する引き締めは一層強化され、マイスターの下で働く職人には身分証明制度が実施された。この制度の実施により職人や徒弟が職場を変える際に、新しい雇主に対し、以前働いていた雇主から貰った証明書を提示しなければならなくなった。この身分証明制度は後に労働者手帳制度となり、19 世紀に入っても職人や労働者を拘束し続けるものとなる。つまり、マイスターは職人に対しての身分証明の発行の権限を持つことになり（ツンフトが保管）、そのことはマイスターから一旦、証明を拒まれた職人は自身の身分証明の保障を失うことを意味し、万一不法行為（悪罵や犯罪など）を起こした場合にはお尋ね者となって全国に指名手配される等、最悪の場合は何処に行こうと仕事に就くことができなくなる。その為、職人たちは必然的にマイスターと役所に服従せざるを得なくなるのである。しかも、兄弟団と職人組合はマイスターに対し抵抗したり、身分証明発行を強制したり、ストライキや一揆（蜂起）を起すことも禁じられる⁷⁷。そして職人の団結を未然に防ぐ処置として職人組合加入の儀式も禁止し、裁判権に関しては職人に対し（マイスターに比べ）、より厳しい制限を設けることとなる。⁷⁸

しかし次第に、人数が増えすぎた為に困窮した小マイスターが富裕なマイスターの下請になる等の要因で、法や協定で保護されている筈のツンフト・マイスターの内部にも次第に「格差」が生じ始める。しかも手工業のツンフト外で就業することも可能となった為、彼らの労働条件は賃金労働者の水準まで悪化して行った。この

⁷⁴ 藤田 pp.26-29

⁷⁵ 高木 p.83

⁷⁶ 藤田 p.196

⁷⁷ 高木 pp.82-83

⁷⁸ 藤田 pp.28-29

状況に不満をため込んだ小マイスターや職人達は本法令に反対し、その運動は次第にプロレタリア化（社会主義思想化）していくことになる。⁷⁹

以上のようにプロイセンでは 1731 年以降「マニュファクチュア国家」⁸⁰として、ツunft制度と職人制度を改革し、併せてツunftの諸権限を国家の手に移すことに成功するのである。次いで 1732～35 年にかけては大規模な産業立法を行い、同時に 1685 年、フランスのルイ 14 世の「ナントの勅令」の廃止により国外に亡命したユグノー教徒（ルターの福音主義に則ったカルバン派プロテスタント）を大量に受け入れて（既存ツunftに縛られない「自由親方」として受け入れた）産業の基礎を固めた⁸¹。

17 世紀に始まるドイツのマニュファクチュアは、18 世紀初期に発達した自然科学とマニュファクチュア技術との融合で飛躍的に発達する。しかしこの時点でも依然として、問屋制家内工業は優勢であり、問屋制は農村の封建体制に根付いた重要な経営形態として維持されていた。しかも、マニュファクチュア企業家の大部分は職人より商人出身で占められ、手工業マイスター出身はごく僅かであった。⁸²

1810 年にプロイセン政府は「営業の自由」（営業条例）（Gewerbeordnung）によりツunftの営業独占権を否定し、本格的にツunftの解体に着手する⁸³。営業条例の主旨は「産業のなかに自由競争の原理を導入すること」⁸⁴であり、プロイセンは世界市場を意識した国内の工業化と市場の単一化を目指し、産業に自由競争を導入して手工業製品の価格引き下げを図った⁸⁵。その効果もあり、ドイツの産業革命は 1830 年代から軌道に乗り出し、1840 年代に入って、工場制工業は目ざましい発展を遂げる⁸⁶。

結局、条例については 1845 年に法制的措置をほぼ終え、フランクフルトのツunft体制は（ドイツ全領邦では 1865 年までに）撤廃されるが、ツunft組織はその後 1845 年に追加された営業条例（1845 年法）で代りにインヌンク（「インヌンクは中世末からツunft制度を補充してきた職種制の同業者組織である」⁸⁷）として公認され、別の形で継続されることになる。徒弟の養成に不可欠な資格証明はインヌンクの審査機関として設立した「コルポラチオン」に委ねた⁸⁸。職人達は歓迎したがマイスター達は特権の喪失を嘆き、1848 年（この年にマルクスとエンゲルス

⁷⁹ 高木 p.83

⁸⁰ 同上 p.80

⁸¹ 藤田 p.20

⁸² 高木 pp.80-82

⁸³ 藤田 p.229

⁸⁴ 高木 p.110

⁸⁵ 同上 pp.110-11

⁸⁶ 同上 pp.171-72

⁸⁷ 同上 p.111

⁸⁸ 同上 pp.109-11

による『共産党宣言』が出される)の三月革命の混乱を利用し、営業条例の阻止を訴える。営業条例は隣国のフランスでは18世紀末の大改革によって完全に定着したが、ドイツは手工業マイスターと政府部内の反対派のせいで19世紀後半(1860年代)⁸⁹と出遅れた⁹⁰。⁹¹

一方、職人プロレタリアの共産主義、社会主義運動とは別の運動を進めた手工業職人達はマイスター達による三月革命と同年の7月、フランクフルト(マイン)で行われた手工業者会議を避け、独自に職人会議を開いた。この会議に集まった職人達は「領邦絶対主義の封建的体制とともに旧いツンフトの独占体制を破棄」⁹²することと、「ドイツ国民それ自体から生み出される社会制度」⁹³を要求した。それと同時に「連邦インヌンク制度」を提案する。⁹⁴しかしその裏で、職人組合は容赦なく廃止へと追い込まれ⁹⁵、その影響で追い出された職人達によって遍歴職人の数が増加する。併せて失業者も増加し、長期間に亘り遍歴で各地を転々としてきた放浪職人(「職人労働者」)⁹⁶も親方に昇格できずに生涯を終える者が少なくなかった。⁹⁷

他方で、職人プロレタリアの結成過程については、1833年フランクフルト(マイン)で起きた事件を機に、ドイツ連邦政府は、急進的なインテリ層(学生、ジャーナリスト、教師)に向けて「デマゴーク狩り」(民衆を煽動する者達の摘発)を実施した。その結果大量の亡命インテリゲンチア(インテリ層)を産み出すことになり、彼らは亡命した手工業者と合流し、組織的活動を始める。⁹⁸1830~40年代にかけては、ジュネーブやパリ、ブリュッセル、ロンドンにドイツの亡命者達が集まり、諸々の変革思想を培っていった⁹⁹。特に1830年の7月革命後のパリは社会主義と革命思想に溢れ、ドイツの手工業者の多くがこれに惹きつけられて遍歴の修業期間の殆どをここで過ごす者も多かった。手工業者の最初のドイツ人組織「ドイツ民衆協会」はこの時期(1832年)につくられた¹⁰⁰。彼らは「手工業者、工場労働者、そして農民は最も激しい仕事をやって富める者を養ってきたのに、最も貧しく最も不幸な人間だ」¹⁰¹という共通の認識の下、政治的自由と統一ドイツを目標に団結した。

その2年後にはドイツ人だけの革命的秘密組織「追放者同盟(Bund der

⁸⁹ 藤田 p.229

⁹⁰ 高木 p.80

⁹¹ 同上 p.111

⁹² 同上 p.134

⁹³ 同上 p.134

⁹⁴ 同上 p.134

⁹⁵ 藤田 p.229

⁹⁶ 同上 p.270

⁹⁷ 同上 pp.164-68

⁹⁸ 高木 p.48

⁹⁹ 同上 pp.47-48

¹⁰⁰ 同上 p.50

¹⁰¹ 同上 p.50

Vertriebenen)」が故国から追放された学生、編集者、大学講師などを指導者に置いてドイツ民主協会の活動を継承した¹⁰²。そのうちに組織上の欠陥から分裂し、幹部に闇雲に従順を強いられることを不満として脱退した下部組織手工業者で1836年、「義人同盟（Bund der Gerechten）」が作られた¹⁰³。

この他にもドイツの職人達は外国で多くの団体を結成したが、それらの多くは「ある程度の政治的偽装をほどこした親睦クラブや教育団体」¹⁰⁴であった。但し、この頃になると組織は以前より進歩し、最高指導部の執行権限はかなり制限され、中央の指導力と共同決定による民主的権力、この両者の良さを巧みに結合した仕組みは、後の時代の社会主義政党や共産党の模範となった¹⁰⁵。

1848年三月革命の前に共産主義や社会主義の洗礼を受けた職人プロレタリアはまだ僅かであり、これとは別に1830年代後半～40年代に、外国帰りの目覚めた職人達は、ドイツに既に入っていた啓蒙主義、民主主義の影響を受け、1840年にはベルリン手工業者教育委員会を設置し、合法的な手工業者・労働者教育協会の形をとって、政治的思想を基礎とした教育運動を始める。これが1844年以降、活発になる労働運動の素地となった。¹⁰⁶

以上のように職人プロレタリアを育てたのは三月革命であり、その後、(ドイツ立憲)国民議会が招集される。この議会は革命の課題「自由と統一」の実現を使命とする筈であったが、知識層による構成員の消極的政策により旧体制の全面的廃止は実現されなかった。これに対し、ブルジョワジーを含めた保守勢力に真っ向から対抗して革命の維持に努めたのは手工業者達であり、当時の労働者達を思想的に指導する立場となる。¹⁰⁷

プロレタリアート（Proletariat 賃金労働者の層）が一つの階級に成熟したのは19世紀であり、その指導的役割を果たしたのが手工業職人だった。彼らは遍歴を通じて宣伝活動を行って組織の活動を広げ、スイスやフランスを拠点に、そこで非合法文書をつくり、メッテルニヒ（Klemens Wenzel Lothar Fürst von Metternich 1773-1859、1814年ウィーン会議を主宰しウィーン体制を指揮したオーストリア外相、後に首相）の検閲制度を免れてドイツ諸領邦内に持ち込んだりもした。¹⁰⁸その後、手工業職人達はドイツのプロレタリアートの運動の中心に立つようになる¹⁰⁹。正に手工業職人の遍歴こそ、プロレタリアートの意識を育て、国境を超えた連帯を

¹⁰² 高木 pp.49-50

¹⁰³ 同上 p.50

¹⁰⁴ 同上 p.48

¹⁰⁵ 同上 pp.50-51

¹⁰⁶ 同上 pp.48-49、pp.133-34

¹⁰⁷ 同上 pp.37-38

¹⁰⁸ 同上 pp.42-43

¹⁰⁹ 同上 p.43

ヨーロッパ内に広げたといえる¹¹⁰。

このような事態に及び、プロイセンと領邦政府は、手工業の窮乏を放置すればプロレタリア化を助長し変革行動に繋がりにかぬないとの恐れから、1849年2月に営業条例の修正を公布する。これにより重要な60種の手工業に、業種別コルポラチオンに代る新たな強制インヌンク制と資格証明制が布かれ、手工業の独立営業の際には、インヌンクへの加入、又はインヌンクの審査委員会で資格の証明が必要となる。更に、仕事の分野の境界の画定やマイスターと職人の審査も規制されるようになる。¹¹¹手工業立法によって布かれたインヌンク制は、その後も問題点を修正しながら20世紀にはようやく充実し、インヌンク事業は各種の協同組合やインヌンク学校の経営にまで広がる¹¹²。そして、現代マイスター制度の基礎と言える「手工業法」は1897年に帝国議会の決議によって制定される¹¹³。

プロイセンでは19世紀は未だ「職人」と「工場労働者」が法制上ははっきりと区別されていた。20世紀頃にはその区別はなくなるが、実際、現実の産業社会の中では対等の立場にはなかった。その為、手工業出身の職人は手工業での訓練を経ない労働者達との組織結成を拒むこともしばしばあった。その点においても遍歴修業というものが手工業職人に与える誇りは、相当なものであったことが分かる。19世紀でも遍歴は手工業職人の修行の中で伝統的に必須の過程になっていたが、先述のように常習の浮浪人やバガボンド(放浪者)に成り果てるものも少なくなかった。しかし、それでも特に若い職人達は誇りを持って遍歴に身を投じたていた。そして、その内の大多数の職人は最後には定住をし、遍歴先で手工業マイスターの娘達と結婚するか、工場の仕事に就いた。手工業職人達の「団体精神や連帯感情」¹¹⁴はこうした遍歴で培われたものであり、正に遍歴こそが職人にとっての荣誉(名誉)そのものであったといえる。¹¹⁵

これまで述べてきたように、ドイツの職人の重要な誇りであった遍歴だが、19世紀後半の鉄道網の発達はこの伝統を過去のものとしてしまう。しかもこれに加え、工業化との競争により、手工業職人達も遍歴を考える余裕さえ失ってしまうのである。¹¹⁶

1868年、北ドイツ連邦成立前後から、資本主義的工業は急速に発展し、1871年にユンカー階級出身の鉄血宰相ビスマルク(1890年辞職)によるドイツ統一が実現し、第二帝国(22の君主国と3自由都市、1帝国領つまりプロイセン王国からなる

¹¹⁰ 高木 p.45

¹¹¹ 同上 p.112

¹¹² 同上 p.129

¹¹³ K.H.フォイヤヘアトほか p.94

¹¹⁴ 高木 p.138

¹¹⁵ 同上 pp.136-39

¹¹⁶ 同上 pp.136-39

連邦) が建設されてからは¹¹⁷大きな躍進を見せる。これにより手工業は大きな構造変化を迫られ、更に手工業者を窮迫させた。¹¹⁸ 特に 60 年代以降の工業化は、金属、機械工業の部門で進み、大量の熟練労働者が必要とされた。そこで窮迫した手工業からマイスターや職人が登用されることになる。彼らは工場の組織内に手工業的身分秩序を導入し、自分達を農村出身や都市の日雇の労働者達から区別した。職人プロレタリアはこれにより、進歩的なブルジョワ達と肩を並べる為の基盤を作ろうとした。¹¹⁹

ビスマルクの労働者政策は「社会政策立法」(1883年に医療保険法、1884年は災害保険法、1889年には老廃疾者保護法が設立される)と、1878年「社会主義者鎮圧方」の二本立てで、飴と鞭の政策であった。前者の「社会政策立法」は 20 世紀につながる福祉体系の原型となった意味で重要であるが、後者の「社会主義者鎮圧方」は、当時のドイツ社会主義労働者党の弾圧の為の法律である。それにも屈せず、後の社会民主党は 1912 年の総選挙で多くの議席を獲得する等、ヨーロッパ最大の社会主義政党となり、片や労働者の生活条件の改善を実践する自由労働者組合も、1912年にヨーロッパ最大の労働組合に成長し、両者が協調しつつ支持者を集めていった。¹²⁰

<現代>

19 世紀末になると、大都市に於ける住民 1000 人あたりの手工業者数は、中都市と比較して半分近くに激減するが、反面、中小都市では職人や徒弟を持たない多くの単独マイスターがしっかりと地域に根付いていた¹²¹。

ドイツの工業労働者の労働条件は 19 世紀末に至るまで、かなり苛酷であり、労働条件の改善は主に労働(組合)運動によってもたらされたが、意外にもこれらの運動を指導したのは、手工業出身の職人プロレタリアであった。彼らは運動を通じて、労働者達の教育や訓練も推進した。その根底には、「労働の規律を維持し、仕事のなかに自分の人格を体現」¹²²するという手工業者の理念(この思想はプロテスタンティズムが源流ともいえる)¹²³がある。そして、職業技術教育を通しての労働者のイデオロギーや世界観の育成はその後、労働組合と労働者政党(自由労働者党)

¹¹⁷ 米田ほか p.146

¹¹⁸ 高木 pp.119-21

¹¹⁹ 同上 p.24

¹²⁰ 米田ほか pp.147-48

¹²¹ 高木 p.119

¹²² 同上 p.174

¹²³ 浜本 p.105

の結成を促すことになる。¹²⁴

1871年にドイツ統一を成し遂げたビスマルクを宰相とする第二帝国政府は、産業革命最中のドイツ産業の発展において、それまでプロイセン政府が施行してきた営業条例の制度が、国内で必要とされる有能な熟練労働者の育成については不十分であると判断し、それ以前の手工業マイスター制度に組み込まれていた職人教育の面での優れた有効性を再認識する。そこで、「マイスター制度の再建と強化」¹²⁵の為に手工業制度の再編を目指し、営業条例の修正に踏み切るのである。このように19世紀末からワイマール体制終焉（1933年ナチス政権誕生直前）に至るまで度々行われた営業条例の修正立法により、手工業は衰退した状態から徐々に立ち直り¹²⁶、手工業マイスターの権限も復活することになる。これらの仕組みは今日のドイツの職業教育制度の基礎となっている。¹²⁷

この頃政治的には、1918年第一次世界大戦の敗北と、ドイツ革命（11月革命）が勃発した翌年の1919年にワイマール共和国が誕生したが、戦後のヴェルサイユ条約でドイツは多額の賠償金を課せられる。戦勝国内のフランスによる激しい取り立てに対しドイツは抵抗を試みるが、その際（ドイツが）行った通貨の増発は後にインフレーションをもたらし、ドイツ経済は破局に至る。1923年「レンテンマルクの奇跡」といわれる金融措置（同年ドイツに設立されたレンテン銀行が、インフレーションによる貨幣価値低下への対策として銀行券を発行）が図られたことと、アメリカやヨーロッパの戦勝国がドイツとその連合国に対して協調政策を取ったことで事態は収拾へと向かい、1924年にはアメリカの銀行家ドーズが委員長を務めるドーズ委員会により起草されたドーズ案（確定年次金の暫定的軽減と、アメリカ資本を中心とする外資のドイツへの導入を柱とする案）により、ドイツ経済は徐々に持ち直す。その後、1929年のヤング案にて賠償総額が正式に減額され、最終決着がはかれるが¹²⁸、結局ヤング案成立のすぐ後のニューヨーク株式市場の大暴落により世界恐慌が勃発し、ドイツの賠償の件はうやむやになり、最終的には帳消しとなる¹²⁹。

この間の職人の社会的状況については、ワイマール体制による1924年以降の合理化政策により、企業を中心に生産費低減を進めたことで、労働者は厳しい状況下に置かれ、人々はこの合理化政策に疑問を持ち始める。特に「中間階級」¹³⁰である手工業者は、合理化の為に大企業が進める産業の機械化（組織化）が大量生産と大

¹²⁴ 高木 p.174

¹²⁵ 同上 p.169

¹²⁶ 同上 p.109

¹²⁷ 同上 pp.168-69

¹²⁸ 米田ほか pp.170-72、pp.175-78

¹²⁹ 同上 p.177

¹³⁰ 高木 p.155

量消費もたした結果生じる物質文明への危惧よりも、精神文化の荒廃に対して大きな危惧や危機感を抱いた。これまで産業を支えてきた人と人との関係は機械に置き換わることで希薄となり、やがて精神の貧困はコミュニティの相互依存の関係を破壊し、エゴイズムの横行は富の独占や格差の拡大を生むこととなる。¹³¹

しかし反面で、ワイマール体制時代には、徒弟の身分は次第に保護されるようになり、教育に関わるマイスターや雇主に対して徒弟の権利、義務も対等に近づいていく¹³²。マイスターと徒弟との間に親権者の承認が必要になり、双方の関係は正式に教育契約を結んだ上に成り立ち、資本主義的工業での労使関係とは明確に区別されるようになる（それでも徒弟はマイスターに対し劣位な立場であることには変わりなく、地位の改善要求は労働組合に頼ることになる）¹³³。

19世紀末～20世紀にかけて手工業の教育体制は公のものとして整備され、徒弟に向けた補習学校通学義務が法定化されていった。ワイマール体制の初期にはその補習学校が職業学校として更に拡充され、手工業や工業（資本制）以外の全産業についても、かつての手工業マイスターの教育方を模範として、マイスターの教育制度の整備が進む。¹³⁴それに加えて資本主義的工業の中でも同じように手工業から移植したマイスター制度が確立する¹³⁵。これは「請負マイスター方式」¹³⁶とも呼ばれ、手工業のマイスターが工場から請負の形で生産や管理全般を引き受けるものである。これは、元々16～17世紀から領邦君主により作られた邦営工場（鋳山、鍛冶場、鋳物場など）での契約（一年）制の「お抱えマイスター」¹³⁷の仕組みがその後も継承され、19世紀の資本主義的工業にも採用されたのである。その後、本格的な工業化の推進により、業務の専門化と共に工場内でのマイスター制度が確立されることになる。¹³⁸

ところで、1919年以降の民主的な憲法（ワイマール憲法）を確立し、世界で最も進んだ自由主義的民主制を樹立しようとしたワイマール体制の下で大統領や大臣になったレーベ、カイル、シャイデマン、ゼウリンク、そしてヴィッセルは全て元手工業職人であり、他にもドイツで19世紀後半に成立する社会民主主義のエリートが多くが手工業者、特に手工業出身の職人プロレタリア出身であり、社会民主主義は手工業職人の世界で培われたと言っても過言ではない。¹³⁹

¹³¹ 高木 pp.155-56

¹³² 同上 p.170

¹³³ 同上 pp.169-70

¹³⁴ 同上 p.171

¹³⁵ 同上 p.158

¹³⁶ 田中洋子 p.48

¹³⁷ 同上 p.47

¹³⁸ 同上 pp.47-49、高木 pp.173-78

¹³⁹ 高木 pp.35-36

ドイツ革命直後からワイマール共和国樹立の頃まで手工業者の大部分が支持したのは「社会民主党」だった。それが翌年 1920 年には「ドイツ民主党」に、1924 年後には「ドイツ国家人民党（ドイツ国家国民党）」に移り変わったが、ワイマール体制下での合理化政策や長引く不況による職人間の格差の拡大に失望し、1928 年には、手工業者の大多数が投票を諦めてしまう。代わりに 1930 年、特に手工業の徒弟や若い職人達を新たに引きつけたのは「国民社会主義」の政党、すなわち「ナチ党」（「国家社会主義ドイツ労働者党」）であった。¹⁴⁰高木氏いわく「1929 年の恐慌以後ミュンヘンその他の大都市ではナチが組織した青年団体に手工業の徒弟や若い職人がなだれを打って加入した」¹⁴¹、このことから考えられるのは、若い彼らが世の中の動揺に巻き込まれ、将来の自足的な職業生活への不安からナチ党に走ったとしても不思議ではないということだ。工場労働者の間でも工場マイスター（後述参照）は社会民主党への忠誠を保ったが、若い労働者や徒弟も手工業の場合と同様にナチ党の青年組織に走る者が増え、中堅労働者は社会民主党と共産党に分裂した。¹⁴²

そして第二次大戦後、ドイツは東西に分裂して国の体制をそれぞれ異にするに至ったが、東西の産業に共通する体質としてマイスター制度に顕現される「マイスター民族」¹⁴³の誇りは東西両国とも健在であったことはせめてもの救いである。

現代のマイスター制度も昔と比較すると内容的にかなり変貌してはいるものの¹⁴⁴、手工業マイスターと工業マイスターの双方はドイツの公式産業マイスターとして今も存続している。但し両マイスターの立場上の規定は同等ではない。手工業マイスターは、手工業秩序法に手工業の独立営業の資格を持つ者として規定されているが、工業マイスターは営業条例の中で依然、工場制企業に雇用されて働く有資格者として規定されているのみである¹⁴⁵。この他に（既述の）工場マイスターというものもあるがこれは非公式な呼称であり、正式には社内マイスターなどと訳されている。¹⁴⁶

これらの規定以外でも手工業者が自分自身を「手工業者」として今尚誇りに思えるのは、高木氏が述べるように、「彼らの連帯の感情、自由の意識、手工業的労働の榮譽が一つになっているエートス（倫理的習性）」¹⁴⁷からくる自信なのであり、その「榮譽」は中世から続く「職人組合」と「遍歴」の慣習とによって培われてきたものなのである。しかも、先述のように中世から職人の先人たちが地域の自治と経

¹⁴⁰ 高木 pp.157-58

¹⁴¹ 同上 p.158

¹⁴² 同上 pp.157-58

¹⁴³ 同上 p.158

¹⁴⁴ 同上 p.159

¹⁴⁵ 同上 p.159

¹⁴⁶ 同上 p.159

¹⁴⁷ 同上 p.129、（ ）内は本論文著者による。

済的発展に深く関わってきた社会的寄与の積み重ねは、現代の職人や労働者の社会的地位の向上だけに止まらず、現代のドイツ産業を支えるモノづくりの理念の根幹を築くという重要な役割を果たしたのである。

現在の手工業マイスター制度も、その運用において行政や、製造業者、そして一部専門家の一任する形で、執行内容を検定や資格の認定のみに集約するのではなく、改めて全手工業に跨る公的な第三者機関である「手工業会議所（Handwerkskammer）」を設置して教育育成機関としての責任を持たせ、技術教育以外の経営全般に関する教育も取り入れながら、責任ある人材育成を土台にして全手工業種の客観的、公平公正の立場で運営を行っている点が特徴的である。このような教育制度の充実は中世の時代から職人が中心となって経験を積み重ねてきたドイツの技術大国としての歴史と経験の深さを感じさせるものであり、ドイツのマイスター資格の社会的信頼を国内外において客観的に高める要因になっているものと思われる。しかも、このような教育過程を経て手工業経営者として晴れて独り立ちを許されたマイスターは、共同体に於ける職業的地位も自ずと確立される為、地域自治との関わりも自然と多くなる。ドイツのものづくり産業の底力は、今でも地域に根付いた職人達と住民同士との結びつきと共に、歴史の中で培ってきた「誇り」に裏付けされた職人達の職業理念の堅固な基盤によって支えられていると言っても過言ではないのである。

〈IV〉 ヘッセの生い立ちと職人にまつわる作品

ヘッセは南ドイツのシュヴァーベン地方、ヴュルテンベルク州の小さな町カルプに生まれる。父カール・オットー・ヨハネス・ヘッセ（Karl Otto Johannes Hesse 1847-1916）はエストニア生まれの北ドイツ系ロシア人であり、18歳の時にスイスのバーゼル（スイス北部）でプロテスタント（新教）の宣教師となる為、伝道団の教育を受け、1869年22歳の時にインドに渡って伝道の活動に従事する。しかし病気を患い、3年後の1873年25歳の時にドイツに帰国。バーゼル伝道団は彼をヘルマン・グンデルト（ヘッセの母方の祖父）の新教出版事業（カルプ出版協会）の助手として派遣する。

ヘッセの母マリー・グンデルト（Marie Gundert 1842-1902）はそのヘルマン・グンデルト（Hermann Gundert 1814-1893）、有名なインド学者であり宣教師であるスイス系ドイツ人の娘としてインドに生まれた。彼女は少女時代をスイスで送った後、父母の居るインドへ渡った。父の病気で一時帰国中にイギリスの宣教師チャールズ・アイゼンバーグと結婚し、インドに戻り布教に従事するが、夫が病に倒れた為、夫と二児を連れてスイスに帰国する。カルプに戻った後に夫が病死（マリー

28 歳)、その頃父グンデルトの助手をしていたヨハネスと出会い 1874 年マリイ 32 歳、ヨハネス 27 歳の時に再婚する。翌年二人の間に長女アデーレが生まれ、その 2 年後 1877 年にヘッセが誕生する。続いて 1880 年、ヘッセの下に妹マルラ、1882 年には弟ハンスが生まれる。『車輪の下』の主人公ハンス・ギーベンラートはヘッセの分身であると言われているが、性格描写からみると弟のハンスをモデルにしたという説もある¹⁴⁸。

1881 年、父の伝道の仕事の為、一家はスイスのバーゼルに転居する。1883 年に父がスイス国籍を取得（元はロシア国籍）。1886 年には再びカルプに戻る。カルプのギムナジウム（ドイツの大学進学の為の中等学校）を卒業したヘッセは 1890 年 13 歳の年に神学校受験の為、ゲッピンゲン（ドイツ南西部、バーデンウエルテンベルク州）のラテン語学校に入学。スイス国籍からヴェルテンベルク州に移籍し、1891 年 14 歳、同州の試験に合格し難関のマウルブロン神学校に 2 番の優秀な成績で合格する。しかし、規則と詰め込み教育、厳格な教師達に反発して、入学から 6 ヶ月で神学校から脱走し、次の年の 1892 年、自殺未遂を起こして神経科病院に入れられる。同年カンシュタットのギムナジウム（試験の為 1 年間の在学資格の取得）に合格し転入するが、教科書を持ってピストルを購入するなど両親を心配させる。結局此処も 1 年足らずで退学となる。同じ年、祖父グンデルトの死去に伴い、父がカルプ出版協会を継承（指導者として）することとなる。ギムナジウムを退学となり、詩人になる夢を諦めることができなかったヘッセはエスリングゲン（バーデンウエルテンベルク州）で書店の店員となるが 3 日で逃げ出してしまふ。その為、父の出版協会を手伝うことになるのだが、その際に祖父が所蔵していた書籍で広範な読書の機会も得ることになる。次の年の 1894 年にはカルプのハインリヒ・ペロット塔時計工場の見習い工となる。こちらも冒頭で述べたように 1 年 3 ヶ月で辞め、1895 年 18 歳でテュービンゲン（バーデンウエルテンベルク州）のヘッケンハウアー書店の見習い店員となる。この時の辛抱が実を結び、1899 年 22 歳の時にバーゼル（スイス）の古本屋、ライヒ書店の助手となり 1901 年の秋に同書店から『ヘルマン・ラウシャー』を刊行。この頃から本格的に執筆活動に従事するのである。¹⁴⁹

『ペーター・カーメンツィント(郷愁)』(1904)、『クヴォールムの物語』(1904)、 『ペーター・バステリアンの青春』(1902)

ヘッセが 1901 年から書き溜めた『ペーター・カーメンツィント』がベルリンにあるドイツの有力出版社、S.フィッシャー出版社より刊行される。これによりヘッ

¹⁴⁸ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第 4 巻）』 p.367

¹⁴⁹ Hermann Hesse Page Japan、『車輪の下』高橋 pp.210-30、三浦 pp.294-318

セは成功を納め、新進気鋭の作家として名を成すことになる。『ペーター・カーメンツィント』は〈I〉で紹介したように「教養小説」に分類され、主人公ペーター・カーメンツィント本人は職人ではないが、詩人を目指した人生遍歴の様を描いている。ヘッセはペーターについてこう話す。

彼が目指す目的や理想とは、同盟のメンバーや、陰謀の共謀者や、コーラスの一声部になることではありません。そうではなく、共同体や、仲間意識や、溶けこむことの代わりに、彼はその反対のことを求めているのです。つまり彼は多くの人々が歩む道ではなく、頑固にひたすら自分独自の道だけを歩みたいと思うのです。¹⁵⁰

話の中でペーターは一人の指物師の職人と知り合いになるのだが、その職人の家族が後の主人公の心境に大きな影響を与え、同時に彼を人間的に成長させる。

職人（親方）との出会いは、ペーターが自分の部屋の書棚作りを依頼したことで始まる。親方が寸法を測りにペーターの部屋を訪れた際、ペーターの部屋に積まれた溜まり過ぎた本の中に「職人の徒弟用の小辞典」¹⁵¹（高橋健二訳）、または「職人言葉の小さな辞典」¹⁵²（春山清純訳）があることに気付く。その小辞典は、「厚紙表紙の小さい本で、ドイツの徒弟宿（春山訳「職人宿」）¹⁵³ならたいていどこにでもある、よくできた、おもしろい本だった」¹⁵⁴と説明されている。職人がペーターに、その辞典を使って実際に勉強しているのかと訝しげに尋ねると、「往来で行なわれている隠語を研究したんですよ」に続けて、「言いまわしを調べるのはおもしろいもんですよ」¹⁵⁵と答えている。これは、ヘッセ本人の言葉として捉えることができる。その理由は、この作品と同時期に手掛けていた『クヴォールムの物語』（1904）の冒頭で、ヘッセがクレーヴェのキーリアン・シュヴェンクシェーデル氏へ宛てた手紙の内容の中で、

ところで老クヴォールムに関しては、あなたが得られた情報はまったく間違いありません。私は彼の歌をある程度収集し、それを若い職人が使えるように出版したいと思いました。しかしこの客層では稼ぎにはならないので出版元が見付からず、あなたがお尋ねのレクラムもだめなのです。そこで私は今度はこ

¹⁵⁰ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第3巻）』 p.13

¹⁵¹ 『郷愁（ペーター・カーメンツィント）』 高橋 p.189

¹⁵² 『ヘルマン・ヘッセ全集（第3巻）』 p.102

¹⁵³ 同上 p.102

¹⁵⁴ 『郷愁（ペーター・カーメンツィント）』 高橋 p.189、（ ）内は本論文著者による。

¹⁵⁵ 同上 p.189

の小さな本を上流の人々向けに出版することにしました。彼らはその気になればお金を払えますからね。しかし、この種の人々はあなたほどには詩を読みたがらないので、その代わりに私はクヴォールムの生涯を綴ってみました。これなら長編小説だと思って、買ってくれやすくなるのです。だからまた、詩の方からはほんの数篇しかこの小さな本に入れなかったのです。¹⁵⁶

特に「私は彼の歌をある程度収集し、それを若い職人が使えるように」の説明と、更に『ペーター・カーメンツィント』の執筆時期が『クヴォールムの物語』の執筆（1902）そして完成時期（1904）と重なる（『ペーター・カーメンツィント』は「1902年から1903年にかけて執筆された」¹⁵⁷）ことから考えて、ヘッセは『ペーター・カーメンツィント』の執筆時には既に、職人についての作品を書く為に自分の見習い修業から得た経験のみならず、職人にまつわる歌や老クヴォールムの情報も収集していたことが伺える。しかも、『クヴォールムの物語』の執筆の材料ともなる「老クヴォールム」を含む職人の歌には隠語が多く含まれている為、その隠語の意味を調べる為に当然、「職人の徒弟用の小辞典（職人言葉の小さな辞典）」を利用していただと考えられ、上記の作品の引用と手紙の内容の辻褄が合うことも理解できる。

しかしながら、実際クヴォールムの伝承に関してはその無法破りで奔放な足跡から、その信憑性が疑われるものも多かったようで、

最後にはすべてになお少々自分なりの味付けも加えて、平均的なクヴォールムのようなものを仕立て上げました。その内の何が真実で何がでっち上げなのか、自分でも分からないのですが。私としては、とにかく読んでさえもらえれば、遠慮なく物語として読んでいただいでかまいません。心からそう願っています。

158

と述べている。しかもこの手紙の最後の方で、「だって我らがクヴォールムは特別な奴でしたし、宿無しでさえなければ、どんな教壇にだって喜んで迎えられる資格があったでしょうから」¹⁵⁹と、褒め称えてすらいる。この表現からもヘッセが『クヴォールムの物語』をどうにかして世に伝えたいと願う切実な気持ちを感じ取ることができる。

実際、この『クヴォールムの物語』は伝説となっている遍歴職人の話であるが、非常に短い物語であり、中には断章の箇所も見られるなど、作品としては未完成に

¹⁵⁶ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第2巻）』 p.242

¹⁵⁷ 井手 p.304

¹⁵⁸ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第2巻）』 p.243

¹⁵⁹ 同上 p.243

終わっている。しかし、同時期か若しくはその後『ペーター・バステアンの青春』、『ペーター・カーメンツィント』をはじめ『機械工場から』、『機械工職人』、『車輪の下』など次々と職人の登場する小説を手掛けており、少なくとも『クヴォールムの物語』の時点で、職人に関する作品を世に送り出そうと決意していたことは確かである。前半の〔ニコラウス・クヴォールム〕の話のクヴォールムは機械工であるが、後半の主人公は馬具職人であり、しかもクヴォールムとは名乗っていないなどの矛盾がある。しかし、この二つの話は『クヴォールムの物語』の中に一緒に収録されており¹⁶⁰、ここで描かれている職人像が、その後続く職人小説の原型になっていることは『ペーター・バステアンの青春』の登場人物、クヴォールムとの関連からも否定できない。

井手氏によると、『ペーター・バステアンの青春』と『ペーター・カーメンツィント』の2作品は同時進行で書かれており、ヘッセは『ペーター・バステアンの青春』を断念したことで『ペーター・カーメンツィント』が完成したと言っている¹⁶¹。そして、『ペーター・バステアンの青春』には『クヴォールムの物語』の主人公、クヴォールムがハンス・ルーイ・クヴォールムの名で登場している。

その風貌は、

彼はほぼ四十歳位で、さっぱり髭を剃った青白い頬をしていて、狭い上唇から薄く長い立派な口髭を垂らしていた。目はとても美しく、心の中まで見通す大きな生き生きした褐色の眼だった。そしてその上に穏やかで高貴な額と黒い本当に手入れの良く行き届いた髪があった。彼の上着は埃っぽかったが非常に上品だった。荷物らしいものは何も持っていない、ただ一本の硬いサンザシの杖を持っていた。古ぼけた^{つば}鍔の広い麦藁帽が彼の顔に良く似合っていた。¹⁶²

そして、人物像は次のように説明されている。

〔…〕ある午後、僕はハンス・ルーイ・クヴォールムと知り合いになった。彼はとても有名で、ここかしこでもう彼について話を聞いていたが、同僚とか仲間というのではなく、僕らのような人間が個人的に出会う機会など得られない英雄みたいだった。彼はただ単に世界の半分を遍歴し、いろんな地方や町、言葉、多くの種類の職業に通じているというだけでなく、とてつもない頭脳の持ち主で、物語を山ほど話すことができ、詩人であり、旅の宿でうたわれる歌の

¹⁶⁰ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第2巻）』 p.324

¹⁶¹ 井手 p.302

¹⁶² 『ヘルマン・ヘッセ全集（第3巻）』 p.254

多くは彼が作ったのだった。その上この名だたる流れ者の背後には幾つかの不気味な事件があり、もう何度か捕らえられて牢に入れられていたこともあって、彼にまつわる話はオイレンシュピーゲルよりもっと沢山知られていた。¹⁶³

とあり、『クヴォールムの物語』の老クヴォールムの話とも一致する部分が多い。しかも、

クヴォールムに最初に一目会った時から、もう彼を好きになってしまったのは僕一人ではなかった。彼のことを必要としない人たちの間にも、数え切れなほほど大勢の友だちがいた。彼の人柄、特に目つきや声には、誰彼の区別なく好意を抱かせる何かがあったので、連邦警官や巡査たちでさえ彼を気に入って、大目に見てくれたのだった。しかし彼を一番愛していたのは女たちだった。ほとんどの村にも女の知り合いがいた。酒場の娘たちや女将たちの間にもだ。それで、いざという時には食べ物であれ、寝る所であれ、決して心配する必要はなかった。¹⁶⁴

この部分は『クヌルプ』の主人公で遍歴職人のクヌルプ、そして『ナルツイストとゴルトムント』の遍歴職人ゴルトムントを彷彿とさせる。ヘッセによると『ペーター・バステリアンの青春』は『クヌルプ』の先駆者であると述べている¹⁶⁵。

また、『ペーター・バステリアンの青春』の中で主人公ペーターはラテン語学校に通う頃から遍歴職人に憧れ、自分もいつか機械工（当時、機械工は手工業の中でも最も名誉ある職種であった）の遍歴職人になることを夢見る。そして卒業後は、友人の伯父である機械工、レンナーの所で弟子入りさせて貰うことになる。4年程経過して、ペーターはこの修業時代の素晴らしく充実した年月について、

何故なら、職人仕事というものの秘密と難しさがゆっくりと着実に目の前に開け、次第に自分の手仕事を信頼することを学んだからだった。それは素晴らしい手仕事で、学ぶことが沢山あるが、大学出の人などには夢想だにできないことばかりなのだ。そしてこの仕事に生れついた者でなければ、どれほど善良な意志をもってしてもすっかり極めつくすことはできないのだ。仕事の中にはおのずとスラスラ^{はかど}捗るものがあったが、どうやってそうできたのか言葉で言うことは決してできなかつただろう。これこれのことを済ませなければならぬ、

¹⁶³ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第3巻）』 p.253

¹⁶⁴ 同上 p.265

¹⁶⁵ 井手 p.302

となるとそのできあがった情景がイメージに描き出され、するとそれが手のも
とで一つに結び合わさるのだ。僕は一つの美しい工具の鋼鉄に、一本の鋭く鍛
えられたばかりの鑿たがねに、一本の新しい鉄の棒に、できあがった鋳物や鋳型に喜
びを覚えた。¹⁶⁶

と振り返る。ヘッセの徒弟経験は1年と僅かであったにも拘らず、作品内でこれ程
の技術談義を披露する基の知識や見識は、当時の先輩職人達からの請売りも多少は
あると思われるが、実際に機械工として作業に携わっていたヘッセ自身が（徒弟時
代に）少なからず職人と同じ目線で手仕事の観察、分析をしていたことが充分想像
できる。ごく短期間であっても、ヘッセにとって徒弟として働いた経験は（ヘッセ
の技術習得達成度は脇に置いて）、「職人仕事というものの秘密と難しさ」や「自
分の手仕事を信頼すること」等の表現にもみられるように、職人技（手仕事）の素
晴らしさを知る上で決して無駄になってはいなかったということであり、寧ろこの
経験こそがヘッセの職人作品を生み出す源泉になっていた、と言っても過言ではな
い。

その他、『ペーター・バステアンの青春』には、その頃の労働者の大多数が社
会民主主義者であると書いてあり¹⁶⁷、〈Ⅲ〉で述べた歴史的事実を裏付けている。

『機械工場から』（1904）、『機械工職人』（1905）

『機械工場から』はヘッセ自身の（ハインリヒ）ペロット塔の時計工場での見習
い体験が基になっている¹⁶⁸。最も腕の良い最年長の機械工職人のハンネスとこの機
械工場の後継者である若い親方との軋轢を描いているが、第三者の立場で語り手と
しての主人公は彼らと同じ工場に勤める徒弟であり、他の職人達と同様にこの二人
のやり取りをはらはらしながら見守っている。一つの事件を扱っているがそれだけ
に止まらず、雇われてはいても親方に闇雲に服従することを良しとしない腕利きの
職人が権威に媚びずに自身のプライドを貫く姿が描かれている。ハンネスは結局工
場を辞め、主人公とも二度と会うことはなかったと書かれていることから町を出
ていったことは明らかで、当然次の仕事場を探しに遍歴の旅に出た筈である。遍歴
に裏打ちされた職人の「誇り」と精神的に「自律」した姿がここにも表現されてい
る。

『機械工職人』も同じく、機械工場での職人と徒弟達との軋轢を描いたものであ

¹⁶⁶ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第3巻）』 pp.247-48

¹⁶⁷ 同上 p.257

¹⁶⁸ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第4巻）』 p.372

る。新参の遍歴職人ツビンデンを巡って、『機械工場から』と同様に一つの事件を扱っている。現代に共通するいじめと自殺の構図が当時の職人の世界にも存在したことを示し、今の我々にも身近な問題として考えさせられる内容になっている。

この中でも、「機械工は、それどころか機械技師も当時、遍歴の途上では自分の組合の誇りをめったに捨てることはなかった」¹⁶⁹と、遍歴職人にとって組合の「誇り」が如何に尊重されていたかについて言及している。その他、『『自分はよそ者の機械工ですが、仕事をもらえますか』という古い職人の挨拶しか言わず、[…]』¹⁷⁰、「彼の労働兼遍歴手帳は申し分なくきちんとしており、その上、徒弟試験の証明書も持っていた」¹⁷¹、「日刊新聞や機械工新聞は、間食の時や昼の間に工場で読むことができた」¹⁷²などから、職人の日常の習慣や遍歴職人のしきたり等も読みとることができるのである。

語り手の主人公は、工場の他の仲間達と同じく、初めのうちはツビンデンを嫌いながらも、途中から徐々に同情的になっていく。しかも、ツビンデンをいじめていた張本人クリスティアンに対し、主人公は終盤遂に共感できなくなり、クリスティアンと主人公の「友情はますます薄れていった」¹⁷³とある。ツビンデンは決して腕の良い職人ではなかったが、最後の限界ぎりぎりまで辛抱強く職人としての筋を通した点において、彼は職人の尊厳や「誇り」を十分に主張したといえるのではないか。少なくとも主人公はそんなツビンデンの最期をととても残念に思っていたに違いない。

『昔の<太陽>で』（1904）

この小説はゲルバースアウ（町の名）の<太陽>と呼ばれる老人ホーム、いわゆる町の救貧院が舞台である。ホームには管理人も居り、天気の良い日は日がな一日通りから少し離れた斜面に座り日向ぼっこをして過ごす、通称「お日さま仲間」達が同居する。その救貧院<太陽>の成立ちと、最初の入居者達の間関係や軋轢が描かれている。入居者は殆どが元職人や親方（工場主）である。町が保護施設として運営するホームは質素であるが食事と寝具が提供され、適度な労働も課せられる。穏やかな毎日であるが、それにも拘らず一度成功を味わい、かつて羽振りの良かった頃に比べて落ちぶれてしまった現実が、入居者の心理を徐々に蝕む様子や人格を変化させていく過程が、それぞれの人物の個性と共に表現されている。事件簿的な

¹⁶⁹ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第4巻）』 p.287

¹⁷⁰ 同上 p.287

¹⁷¹ 同上 p.287

¹⁷² 同上 p.288

¹⁷³ 同上 p.292

要素もあるが、元親方や遍歴職人だった頃のプライドを捨てきれず老いても尚、かつて羽振りの良かった頃と現状との葛藤に苦しむ姿は、現代にも通じる人間の相を描いているとも言えよう。

ここで注目しておきたいのは、

その頃、ゲルバースアウにはまだ救貧院はなく、役立たずの者たちは町の財政からわずかな補償と引き換えに、あちこちの家庭に賄い付きの下宿人として預けられた。そこで彼らはぎりぎり必要なものを支給され、なるべくちょっとした家事の手伝いをさせられた。ところがこのことから最近ではいろいろ不都合が生じ、住民の憎悪を受けていた落ちぶれた工場主などまったく誰も受け入れようとしなかったので、町は保護施設として特別な家を工面せざるを得なかった。そしてちょうどみすばらしい古い料理店<太陽>が競売に付されたので、町がそれを買取り […]。¹⁷⁴

の箇所である。社会福祉が町や地域（共同体）単位で行われ、住民同士の協力によって成り立っていたことがこの記述から伺える。

『ある発明家』（1905）、『初めてのアバンチュール』（1905）

『ある発明家』は、語り手である主人公と同じ機械工場の同僚で、友人のコンスタンティン・ジルバーナーゲルについての小説である。彼は同性異性問わず人気があり、「彼は稼ぎがよく、その気になればすぐにでも親方になれた」¹⁷⁵にも拘らず、何故か結婚したがない。主人公をはじめ仕事仲間たちは首をかしげ嘲笑いさえする。

ところで、コンスタンティンは誰にも好かれる人物だった。彼は我々に、自分の方が我々仲間よりも器用だとか、物分りがよいとか一度も感じさせなかった。誰かが助言を求めた時だけ、彼は喜んで力を貸し、一緒にかかわった。それ以外は、彼は子どものように、簡単に笑わせたり、感動させたりすることができ、気まぐれだが、人のいい人間だった。私は、彼が徒弟を殴ったり、不当に叱りつけたりしたのを見たことがなかった。¹⁷⁶

¹⁷⁴ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第4巻）』 p.172

¹⁷⁵ 同上 p.351

¹⁷⁶ 同上 p.351

彼は才能や経験では仲間の誰よりずっと勝っており、親方とも容易に張り合えただろう。彼が仕事をしているのを見ると、手仕事の楽しさがよく分かった。それほどやすやすと、嬉しそうに、間違いなく、すべてやってのけた。居眠りしたりウトウトしたりはできず、絶えず注意を行き届かせていなければならない精密な仕事だけを彼はこなしていて、一つとしてだめにしたことはなかった。一番楽しいのは、新しい機械を組み立てることだった。自分では今まで一度も使ったことがないような機械装置を、彼は朝飯前といったふうに組み立て、動かして見せた。そんな時、彼はとても気品に満ち、格別に見えたので、精神が素材を意のままにし、意志は生命のないどんな物質よりも強い、ということがどういうことなのか、私はその頃初めて本当に分ったのだった。¹⁷⁷

これらの文章からコンスタンティンが職人としてだけではなく、人間として尊敬すべき人物であったことが伺える。これも、ヘッセの機械工見習い時代の経験を基に書かれたものと推測されるが、このような人物が実際ヘッセの身近に存在していたであろうことは十分に考えられる。

そしてこの小説の結末は、友コンスタンティンがその職人魂により、頂点（自分の発明で特許の取得）を目指して飽くなき挑戦を続ける意気込みを描いて終わるのであるが、才能があるにも拘らずそれを鼻に掛けることもなく、それどころか誰にでも愛想が良く、近所の女の子たちみんなとも仲がよく（女嫌いでもなく）、堅実に貯金もしているこの職人が、本来若者であれば誰しもが興味を持つ筈の結婚については見向きもせず、ひたすら自分の技術の可能性を信じて真摯に取り組む姿が清々しく印象的であり、この青年の内面に、職人の「誇り」が表現されている作品といえよう。

『初めてのアバンチュール』は『ある発明家』と比較すると、極めて私小説的である。主人公は敢えて名乗らず「私」と表現されていることから、ヘッセが機械工時代に体験した（恐らく初めての）アバンチュールについて書かれていると思われる。ある金持ちの、工場経営者の未亡人の家に、その親戚で見習い工仲間でもある友人と共に（二人で）招かれた際、夫人が、「で、あなたもアカでらっしゃるのね？」¹⁷⁸と尋ねたのに対し、私が「社会民主主義者かということですね？ええ、たしかに」、「一体どうして？」、「信念なんです」¹⁷⁹と答える場面がある。ヘッセは実際のところ、このような政治的組織に加わったり、活動に関わったりすることはなかったとされる。ただ、本人に関わりがなくても、私小説的なこの作品から推測できること

¹⁷⁷ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第4巻）』 p.352

¹⁷⁸ 同上 p.362

¹⁷⁹ 同上 p.362

は、恐らくヘッセの居た職場（時計工場）も例に漏れず職人達と社会（政治）活動との繋がりが少なからずあったということである。〈Ⅲ〉〈現代〉で既に述べた通り、「ドイツで 19 世紀後半に成立する社会民主主義のエリートが多くが手工業者、特に手工業出身の職人プロレタリア出身であり、社会民主主義は手工業職人の世界で培われたと言っても過言ではない」ことが、作品の背景に映し出されている。

但し、この夫人自身はその身なりから、政治的な関わりとは無縁であるらしいと書かれている。しかし、その正確な正体については、はっきりと示されていない。

最終的に、結局この「私」もヘッセと同様に、「そして秋の終わりに私は機械工をやめ、青いシャツと永遠におさらばした」¹⁸⁰のであるが、ここからも主人公の境遇が、ヘッセ自身の身の上の上に限りなく近いことが分かる。

『車輪の下』（1906）

ヘッセの自伝的小説ともいえるこの作品は『ペーター・カーメンツィント』に続く長編小説で、新聞と雑誌に掲載された後、同じく S.フィッシャー社より刊行され成功を納める。先述のように主人公のハンス・ギーベンラートのモデルとなった人物がヘッセの弟であったという説もあるが、一方で神学校を中途退学し機械工場に就職したことや、精神疾患による体調不良（頭痛等）に悩まされたことについてはまるでヘッセの青年の頃の体験そのものである。またハンス（入学当初は模範的生徒であったが）の神学校の、いわゆる不良の友人ヘルマン・ハイルナーは詩作を好んだ早熟な天才少年であるが、学校を脱走するなど反抗的な面についてもヘッセに良く似ていると言われる。小説のタイトル『車輪の下』はドイツ語では「落ちぶれる」¹⁸¹という意味があり、この小説の中に、主人公の個性や人間性が全体主義的国家の画一的教育によって潰されるという警告、或いは社会的批判が込められている¹⁸²。

この作品の登場人物、靴屋の親方フライクは、まじめな「敬虔派信者」（プロテスタントの形骸化を批判したプロテスタントの分派で 17 世紀末のドイツで生じ、ヘッセの祖父が属したカルプの出版協会がその中心となっていた）¹⁸³である。年に一度の「いけにえの儀式」¹⁸⁴である州試験を残り一週間に控えたヘッセに対して、幸運を祈るよとって少年を励ますが、そんなフライクに対して、ハンスは「ちょ

¹⁸⁰ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第 4 巻）』 p.365

¹⁸¹ 同上 p.369

¹⁸² 同上 p.370

¹⁸³ 同上 p.9、pp.158-59

¹⁸⁴ 同上 p.5

っぴり良心の痛み」¹⁸⁵を感じた。

—そんな試験なんてのはな、どっちみちたいしたことじゃないんだぞ。当りはずれがあるものなんだからな。落っこちたって、ちっとも恥じゃない。いちばんできるやつだって、落ちることがあるもんだ。もしおまえがそうなっても、どうか考えてほしい。神さまはそれぞれの人にちがう思し召しをもっておられるんだと。そして、その人にしか行けない道に導いておられるんだと。¹⁸⁶

何故なら彼の、落ちついて深みのある人柄を大変尊敬していたにも拘らず、他のみんなが敬虔派信者たちを散々笑い者にするのを聞くと、時々やましさを感じながらも一緒に笑っていたからだった。それと同時に、厳しい質問をされるのではないかと暫く逃げるようにフライクを避けていた自分の意気地のなさも恥じていた。特に、「ハンスが先生たちの自慢の種になり、自分でも少しうぬぼれはじめてからは、フライク親方はしばしば妙に気になる目でハンスを見つめ、誇らしさに水を差そうとした」¹⁸⁷ことに対し、「反抗期のまっ盛り」¹⁸⁸でもあったハンスの心は「この善意で導こうとする人からだんだんと離れてしまった」¹⁸⁹のである。このように昔と変わらず、常に見守り、語りかけてくる親方が「どれほど自分のことを心にかけて、あたたかく見守ってくれているかに、気づいていなかった」¹⁹⁰と、まるでヘッセが自身の青年時代を回顧しているかのように、話の語りが全ての真実を見抜いているのである。

その後、ハンスは神学校に合格し、入学前の夏休み中に、牧師に新約聖書のギリシア語の予備学習の手解きを受ける約束をした帰り道、その事情を知ったフライクが皺の寄った広い眉間に更に太い皺を寄せて、重々しい溜息と共にハンスを諭す¹⁹¹。

おまえにいつおきたいことがある。いままでは試験があったから、ひかえていたんだけどね、もう忠告しなくちゃならん。あの牧師は不信心者だってことを知っておいてくれ。あいつは、聖書が偽物だとか、うそっばちだとかいって、おまえをたぶらかすだろう。あいつとっしょに新約聖書を読みおえた日にゃ、気づかぬうちにおまえ自身も信仰をなくしてるぞ。¹⁹²

¹⁸⁵ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第4巻）』 p.9

¹⁸⁶ 同上 p.9

¹⁸⁷ 同上 p.10

¹⁸⁸ 同上 p.10

¹⁸⁹ 同上 p.10

¹⁹⁰ 同上 p.10

¹⁹¹ 同上 p.37

¹⁹² 同上 p.37

そして、ハンスとの間で、なぜそんなことが分かるのかと問答を繰り返し、「いや、ハンス、残念ながらわかってるんだ」¹⁹³と答えた後、「[...]もし牧師が、聖書は人間の作りもので、うそだ、聖霊の暗示ではない、などといったら、わしのところに来なさい。そしてそのことについて話しあうことにしよう。いいかい?」、「うん、そうしよう、フライクさん。でも、そんなひどいことはないよ」と、ハンスが言うと「やがてわかるさ。わしのいったことをおぼえていなさい」¹⁹⁴、ハンスはこの意見が親方だけのものではないことも知っていた。しかし、この問題がそれほど「重大で恐ろしいもの」¹⁹⁵とは思えなかった。しかし、これが最後には現実となる。

ハンスが真実に目覚める機会は度々あった。例えば、「学校で身につけた形式的なキリスト教信仰は、たまに靴屋と話すときにだけ、自分の血肉となって目覚めるのだった」¹⁹⁶と書いているように、フライクは本当の意味でハンスの信仰心を刺激し、ハンスも心動かされていることを実は自覚していた。それにも拘らず、

靴屋が長年の苦勞でつちかった鋼のようなきびしさは、少年には理解できなかった。おまけに、フライクはかしこい男ではあったが、単純で視野の狭いところがあり、信心ぶりが極端なので、多くの人にからかわれていた。祈祷の集会では、きびしい平信徒の審判者をつとめ、聖書の解釈で強い影響力を発揮した。村々をまわっては教化活動にはげんでいた。しかし、ふだんはまったくささやかな職人で、偏屈さもほかの町民たちと変らなかった。¹⁹⁷

のように、ただでさえ若いハンスにとって、他人の評価や外見の印象に惑わされずに、親方の本質を正しく理解することは無理であった。

この後も、フライクはハンスが勉強に追われて休暇中も殆ど休んでいないのを心配して、「むちゃだ、ハンス。そりゃ罪だぞ。おまえの年ごろではな、しっかり外の空気を吸って、運動もして、ちゃんと休まないといかんだ。なんのための休暇だと思ってるんだ？まさか部屋にこもって、勉強をつづけるためじゃないだろう。これじゃ、まるで骨と皮じゃないか」¹⁹⁸と声を掛ける。しかしそれでも、ハンスが牧師を目指していることを心から祝福する。「このおごそかさ、祈り、標準語のいいまわし。これらが、少年には息苦しくてやりきれなかった。牧師は別れるときにそん

¹⁹³ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第4巻）』 p.38

¹⁹⁴ 『車輪の下』 高橋 p.53

¹⁹⁵ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第4巻）』 p.38

¹⁹⁶ 同上 p.38

¹⁹⁷ 同上 pp.38-39

¹⁹⁸ 同上 p.45

なふうにはしなかった」。¹⁹⁹フライクに自分の最も触れられたくない所を指摘され、しかも話し方や考え方が時代遅れで、話をしたくなくてもお節介に声を掛けてくることに鬱陶しさを感じていたのであろう。

神学校に入学してから一年が経とうとしていた時、体調を崩したハンスは医者から学校への通達もあり、静養の為に帰省することになる。しかし校長は既に察していたが、授業に遅れを取った生徒が再び学校に戻る可能性は殆どなかった。ハンスは帰宅して、ギーベンラント家に隣接する二つの路地、<ゲルバー小路>と、「急なぼり坂の、短く狭いみすぼらしい路地」である<鷹>小路²⁰⁰に久しぶりに出向く。この「路地は狭く、奇妙に曲りくねっていて、年じゅう日が差さなかった」²⁰¹、尚且つ「貧困、悪徳、病気のたまり場」²⁰²であった。「間借人や宿泊者を全員除いてもなお、じつに多くの所帯が住んでいた」²⁰³そして放浪の行商人や工場（皮なめし、たばこ）の工員、職人（機械工のポルシュじいさん）も住んでいたようである²⁰⁴。しかし、そこの素朴で人間臭い住人達とは子供のころから身近な触れ合いがあったハンスは（「ぜったいにやめろという父親に逆らい」²⁰⁵）、久しぶりに訪れたこの界限で一時、本来の人間らしい感覚を取り戻す。それは、「ハンスは暗い戸口にたたずんで、彼らのほうに耳をすませた。たそがれていく皮なめし工場の庭は、深い安らぎにつつまれていた」²⁰⁶の表現に現われている。貧しく荒んで、世間から取り残されたかのような<鷹>小路の人々の生活の中に、本来の飾らない、取り繕うことのない真の人間の温かな心の営みを感じた場面である。

この小説の第六章では秋の収穫の時期を取り上げている。川下の水車場で、地域の住民が絞り機を借りてこの時期一斉にリンゴの果汁を絞るのである（「南ドイツの秋（10月）を代表する風習」²⁰⁷）。その賑やかで喜ばしい雰囲気は、

数日前から、川には果汁のしぼりかすが大量に流れていた。いま、压榨場でも、どこの水車場でも、みんなが果汁しぼりに精を出していたからだ。町じゅうの路地という路地に、果汁の匂いが、かすかに発酵しながらただよっていた。²⁰⁸

から想像できる。そして、フライク親方は「小さなしぼり機を借りていて、ハンス

¹⁹⁹ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第4巻）』 p.46

²⁰⁰ 同上 p.111

²⁰¹ 同上 p.111

²⁰² 同上 p.111

²⁰³ 同上 p.111

²⁰⁴ 同上 pp.112-16

²⁰⁵ 同上 p.112

²⁰⁶ 同上 p.117

²⁰⁷ 同上 p.164

²⁰⁸ 同上 p.119

を果汁しぼりにさそってくれた」²⁰⁹のである。銘々が自宅で実ったものや買った果実を持ち寄り、その場で買うものもいる。当然貧しい者は沢山買えず、たとえ一袋しか持たなくても、コップか素焼きのボールで味見をし、水を混ぜながらも「誇らしくうきうきした気分では少しも引けをとらなかった」²¹⁰と誰もがこの日を心から楽しんでいる雰囲気伝わってくる。また、何らかの理由でまったく果汁しぼりができない者も、

〔…〕知りあいや近所の人を、しぼり機からしぼり機へとたずねまわった。あちこちで、一杯ついでもらったり、リンゴを一個ポケットに入れてもらったりしながら、玄人ふうの発言をして、少しは果汁しぼりに通じているところを見せようとした。一方、子どもたちのほうは、貧しい子だろうが裕福な子だろうが、おおぜいが小さいカップを手に走りまわっていた。どの子も、かじりかけのリンゴと一切れのパンを手にしていて。 ²¹¹

とあり、老若男女が果汁を味わったり自慢をしたり賑やかに楽しんでいる。フライク親方も年長の見習いに手伝わせながら自分が作る極上の果汁に満足気である。親方の子供も更に満足し、それ以上に「いちばん満足していたのはフライクの見習いだった」²¹²と書かれているように、外での心地よい労働をこの貧しい農家出身の青年は満面の笑みを浮かべて満喫していたのである。このように貧富の差関係なく地域をあげて、喜びに満ち溢れ、賑々しく収穫の恵みを皆で謳歌する情景が目につかぶ印象的なシーンである。

その後、ハンスが父からの提案と、友人で機械工のアウグストからも勧められ、シューラーの機械工場で働くことになる。アウグストが仕事の楽しさややりがい誇らしげに語る内容に心を動かされただけでなく、ハンス自身も、

〔…〕人間も歯車もベルトも、規則正しく働きつづけた。ハンスは生れてはじめて仕事の賛歌を耳にした。いいなと思った。少なくとも初心者にとって、その響きにはなにか心をつかみ、うっとり酔わせるものがあった。自分の小さな体も生命も、ある大きなリズムに溶けこんでいるのを感じた。 ²¹³

このように、初めて味わう新鮮な感動と共に、ハンスは機械工の仕事に魅せられて

²⁰⁹ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第4巻）』 p.119

²¹⁰ 同上 p.120

²¹¹ 同上 p.120

²¹² 同上 p.121

²¹³ 同上 p.142

いく。そして、今迄に一度もやったことのない労働に戸惑いながらも懸命に働き、初めて迎えた休日、ハンスは、まるで生まれ変わったかのように生きている感覚を味わうのである。

〔…〕ハンスはここ何ヶ月ぶりかに日曜の喜びを味わった。手が黒ずみ、体もぐったりする仕事日のあとだけに、通りはいっそうおごそかで、太陽はいっそう晴やかで、なにもかもがいっそう楽しげで美しかった。どうして肉屋や、皮なめし職人や、パン屋や、鍛冶屋が、店の前で日当たりのいいベンチに座り、ゆうゆうとほがらかそうにしているのか、そのわけをハンスはようやく理解した。もう彼らのことを俗っぽいあわれな人たちとは思わなかった。工員や職人や見習いたちがぞろぞろ歩いたり、飲み屋に入っていったりするのが見えた。

〔…〕みんながみんなではないけれど、たいていは職人仲間が集まっていた。指物師は指物師と、左官は左官といっしょになって、それぞれ職の名誉を守っていた。彼らのなかでは鉄工職人がいちばん高級な業種とされ、その頂点が機械工だった。これらすべてが、なになかなつかしいものを宿していた。いくらか素朴でこっけいなものも多かったけれど、それでも手工業の美しさや誇りを奥に秘めていた。すべてが、こんにちまで変ることなく、喜ばしいものやしっかりしたものを表わして、どんなにみすぼらしい仕立屋の見習いも、かすかな光を保ちつづけているのだ。²¹⁴

この箇所は、主人公が職人の本質的価値に気が付く場面であるが「そのわけをハンスはようやく理解した。もう彼らのことを俗っぽいあわれな人たちとは思わなかった」には、ヘッセの見習い時代に体験した実感がこもっているように感じられる。特に「職の名誉」、「なになかなつかしいものを宿していた」、「手工業の美しさや誇りを奥に秘めていた」、「こんにちまで変ることなく」、「喜ばしいものやしっかりしたものを表わして」、「かすかな光を保ちつづけている」などの表現では、冒頭でも述べたが、ヘッセの職人への「愛着」と共に、衰退しつつある職人文化の魅力を後世へ伝承する作家の動機の根拠にもなる、ヘッセ自身が率直に感じた職人観をみることができる。しかもこの職人観は、先述の歴史の検証に照らしても、中世からこの時代まで遍歴を通して経験を重ね、「誇り」を磨いてきた職人の本質を突いているといえるだろう。

このように職人について理解を深めながら、日曜日に若い機械工仲間たちと過ごすことで、「頼もしい一団」²¹⁵の一員であることを誇らしく思うハンスの気持ちが、

²¹⁴ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第4巻）』 p.145

²¹⁵ 同上 p.145

「彼らの一員であることがうれしかった」²¹⁶の一文からも理解できる。しかし、これから始まる日曜日のお楽しみには「ちょっぴり不安もあった」²¹⁷の箇所は、虫の知らせとも取れる微妙な表現である。ハンスは自分の運命を感じていたのだろうか、それとも慣れないことへの自信のなさなのか、いずれにしてもこの段階での「不安」には「死」に関するハンス自らの意指や不穏な兆しは感じられない。

職人の遍歴の自慢話についても書かれている。

職人が、遍歴した日々のことを話した。彼がどれほど大ぼらを吹こうと、だれも不愉快には思わなかった。そういうものだからだ。どんなにつつましい職人でも、自分で食べていけるようになり、むかしの自分を知る者がそばにいなくなると、大げさで、派手な、それどころか伝説でも語るような口調で、遍歴時代のことを話すものなのだ。なにしろ、職人生活を彩るみごとな詩情は、民衆の共通の財産であって、そのおかげで、古い伝統的な冒険話が新しい装飾をほどこされて、ひとりひとりの生活のなかに現われることになる。どんな貧乏職人でも、いったん語りに入ると、あの不滅の道化者オイレンシュピーゲルや不滅の旅職人シュトラウビンガーのようなどころを見せるのだ。²¹⁸

特に、「職人生活を彩るみごとな詩情は、民衆の共通の財産であって」の表現には、少なくともヘッセが遍歴職人の詩作の価値を高く評価していたことが伺える。そして「不滅の」存在である、いわば伝説の人物である道化者や旅職人がいたことも興味深い。

しかし、話の中身はいつもむかしのままで、みんな何度でも喜んで耳を傾ける。むかしながらのいい話は職人仲間の名誉にもなるからだ。とはいえ、体験にかけての天才や、創作にかけての天才——要するに同じことだが——が、遍歴職人のなかにそう多くはいないだろうとか、いまはもういなくなってしまうとか、そういう意味ではないのだが。²¹⁹

つまり、職人は「名誉」を維持する為に、お互いの体験を共有し合うと言うことである。

その後、仲間達と別れたハンスは家へ帰ろうとするものの、酔っ払って朦朧とす

²¹⁶ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第4巻）』 p.145

²¹⁷ 同上 p.145

²¹⁸ 同上 pp.146-47

²¹⁹ 同上 p.148

る意識の中、リンゴの木の下に倒れ込む。「いろんな不愉快な思いや、身もだえするほど悪い予感、定まらない考えなどがつぎつぎに現われて、眠りにつけなかった」²²⁰と同時に様々な思いがこみ上げてくる。

汚され、辱められたような気がした。どうやって家に帰る？父さんにはなんていったらいい？あした、ぼくはどうなるんだ？ハンスはひどく打ちのめされた、みじめな気もちになった。まるでもう永遠に休み、眠り、恥じつづけるしかないようだった。頭と目がずきずきした。立ちあがって歩きつづける力すら、もう残っていないように思われた。²²¹

その後、一瞬陽気さが戻ったかのように無意識に歌い出すが、「歌い終るか終らないかのうちに、心の奥底でなにかがうずいた。ぼんやりした想像や思い出、恥づかしさや後悔が濁流となっておそいかかってきた」²²²、そしてハンスは呻き、しゃくり上げながら倒れこみ、再び立ち上がって山をふらふらと辛そうに下りて行く。その暫く後に、「ハンスはもう冷たくなって、静かにゆっくりと、暗い川を流されていた」²²³のである。この描写から、ハンスは自殺をしたとも考えられるが、敢えてヘッセはこう書いている。

どうしてハンスが水に落ちたのかも、だれひとり知らなかった。おそらく道に迷い、けわしい斜面で足をすべらせたのだろう。あるいは、水を飲もうとして、バランスをくずしたのかもしれない。美しい水面に魅せられて、水の上にかがんだとも考えられる。そして、夜といい、青白い月といい、あまりに平和な、深い安らぎにみちたまなざしをよこすものだから、つかれや不安から逃れたかったハンスは、死の影にどうしても逆らえなかったのかもしれない。²²⁴

ここで考えたいのは、職人の新しい世界に踏み出し、その喜びを感じ、これからというときに何故、ハンスはその人生を終わらせなければならなかったのか、ということである。以前、学校を辞めてうな垂れている時に、病も手伝って自殺を考えたことがあったが、その時は思い留まった。そして今回の場合は、上記引用の最初に示される、「どうしてハンスが水に落ちたのかも、だれひとり知らなかった」ことから、彼の「死」の原因については作者も言葉を濁している。つまり、事故であれ

²²⁰ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第4巻）』 p.154

²²¹ 同上 p.154

²²² 同上 p.155

²²³ 同上 p.155

²²⁴ 同上 pp.155-56

自殺であれ、ハンスの「死」はそれまでの教育の問題点を浮かび上がらせる為の手段であり、特に最後のフライクと父親との会話からも、優秀で才能のある子供の人生を誤った教育によって台無しにしてしまった（父親の）過失を息子の「死」によって裁いたとも言える。しかし、教育のみならず、周囲の大人の保護者としての責任について問い掛けていることも考慮すべきである。ハンスは死の直前に父親の影に怯え、酔いつぶれたことへの自責の念に苛まれ、自問自答を繰り返しながら半ば自暴自棄になっていく。この様子から、絶えず厳格な父の影がハンスの前に立ちただけで、ハンスの人生を追い詰めてしまったことを改めて想起させられるのである。権力や威厳に付き従い、「乾ききった感性」²²⁵の父親は、息子の本当の姿を見ようとせず、良かれと思う自分の理想を押し付けてきた。落伍者の烙印を押され、その上に未だ自分を追いつめる父の影に常に怯えていたハンスの精神の病は、死の影に抗うことができない程、彼の生命力を奪っていたのかもしれない。

帰ったらぶちのめしてやると怒っていた父親は、次の日の昼に発見されたハンスの死に顔を見る。その時のハンスの様子は、「かわいらしい顔はまどろんでいた」²²⁶更に、

目には白いまぶたがかぶさり、閉じきっていない口はいかにも満足そうで、ほがらかにさえ見えた。この少年には、花の盛りにとつぜん折り取られ、人生の喜ばしい道から切りはなされたようなおもむきがあった。父親もまた、つかれて孤独な悲しみにくれつつ、そうしたほほえましい錯覚を抑えきれなかった。

227

この「花の盛りにとつぜん折り取られ」というのは、学校を退学し牧師への道を断念したことではなく、機械工としての職人の道へと新たな「人生の喜ばしい道」に立った、今これから青春を謳歌しようとした矢先の突然の死とした方が自然ではなかろうか。

最後に悲しみに暮れる父親にフライク親方は慰めるように、「[...] あなたもわたしも、この子にしてやれなかったことが、きっとたくさんあるはずです。そうは思いませんか？」²²⁸そして、「靴屋は悲しげにほほえんで、相手（父親）の腕を取った」²²⁹のだった。父親の他に最後までハンスを可愛がり、そして悲しみに暮れる父親の心に寄り添ったのは、フライク親方だったのである。

²²⁵ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第4巻）』 p.108

²²⁶ 同上 p.156

²²⁷ 同上 p.156

²²⁸ 同上 p.157

²²⁹ 同上 p.157、（ ）内は本論文著者による。

『小さな町で』（1906/07）

この未完の小説は、ヘッセの故郷のカルプをモデルに書かれたとされる。町の公証人の跡取り息子ヘルマン・トレフツが、先の存続が危ぶまれる染色業者ツンフトの資産を狙う目的で、自らそのツンフトへの加盟を企む。しかし、当ツンフトに残る三人の独身会員の内の一人である親方ユーリウス・ドライストと、町に愛着を持つ風刺画家ヘルマン・ラウテンシュラーガー（ステッキとブリキの箱、マントと遍歴帽が彼にとって思い出の詰まった友達という変わり者²³⁰）に、逆に一杯食わされて笑いものにされ、茶化される（懲らしめられる）というあらすじである。

ゲルバースアウには、数々の消え去った過去の余韻とならんで、なお大昔の同業者組合、ツンフト制度の名残の幾つかが生き続けていた。古いツンフトの大多数はもちろん休眠状態にあるか、あるいは普通の協会に姿を変えていた。だが、二つの現役のツンフトが、中世以来のその種の組織から直接に受け継がれたものとしてまだ存在していた。²³¹

そしてその中の〈染色業者のツンフト〉は「数世紀前には世襲の非常に高貴なものだったが、時代と共にほとんどが死に絶えてしまい […]」²³²とある。ヘッセがこの作品を執筆した年代から考えるとその当時のドイツは、「営業の自由」令（1810年プロイセン政府により施行）により 1860年代から本格的に国内でのツンフトの解体が進み、代りに他の労働者組合や協会が結成された頃、又はその後の状況下であると推測できる。しかも、ツンフトが世襲を重んじていたという慣習もこの作品内で明確に示されている。また、「毎年ツンフト主催の食事会と謝肉祭の舞踏会を開き、賃貸ししている会の建物に特別なツンフトの部屋を所有しており […]」²³³の箇所も、地域に於けるツンフトの力と歴史の項目で述べた事実を裏付けている。

トレフツが、理髪店でたまたま開いた雑誌の頁に自分の戯画（ラウテンシュラーガーが描いた）が掲載されていることを発見する風刺雑誌の名前が《ハンス・ザックス》で、ドイツの職匠歌人（1494-1576）の名前が付けられているところが（実際は田中裕氏によると、この雑誌は当時人気のあった《ジンプリチシムス》であろうということである）²³⁴洒落ている。

²³⁰ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第5巻）』 p.149

²³¹ 同上 p.151

²³² 同上 p.151

²³³ 同上 p.151

²³⁴ 同上 p.369

そして、町を心から愛しながらもその住人達から疎まれる存在である風刺画家ラウテンシュラーガーの、たとえ周囲から嫌われて自分が傷ついても、強い郷土愛により唯ひたむきに町の人々を描き続ける姿勢は、ヘッセ本人と通じるものがあると田中氏は述べている²³⁵。しかも、風刺画家のファーストネームはヘッセと同じヘルマンだが、何故かトレフツも同じヘルマンである。名前が同じで、しかも同世代の若者同士（幼馴染）でもある二人の登場人物は、互いに対照的な人生を歩み、内心では相手のことを多少意識しつつも普段から双方無関心を装い、陰で密かに張り合っている様子が微笑ましくもある。

『ハンス・ディーアラムの見習期間』（1909）

ゲルバースアウの大きな紡績工場の機械の修繕を請け負う小さな機械工場を舞台に、若い親方と、同年のベテラン職工、そして裕福な皮革商人の息子で見習い（徒弟）となった主人公、以上三人の男達が繰り広げる、請負先の紡績工場で働いている若い一人のイタリア人女性を巡る争いと、男達の職場（機械工場）での職工達の間模様を描いたものである。話の筋としては『機械工場から』や『機械工職人』のように事件簿的な傾向の作品である。ベテラン職工はいつ独立しても良い程の腕を持ちながら、その女の為に後ろ髪を引かれてなかなか遍歴に出ることができない。その葛藤が解消される最後の展開があっけなくも単純でありながら、物語の最後では、そのベテラン職工を通して職人の「誇り」の高さからくる「潔さ」を感じさせるのである。遍歴には「労働手帳」と「親方の勤務証明書」が必要であるということが小説の中で説明されている²³⁶。

『大旋風』（1913）

この小説の出だしに「1890年代のなかばごろのことであった。当時私は、ふるさとの町のある小さな工場で無給の見習い奉公をしていた」²³⁷とあるように、1895年ヘッセの18歳の誕生日の前日7月1日に実際に起きた、故郷カルプを襲ったサイクロンの話である²³⁸。豊かな自然の描写と対比して、突発的で無残な自然災害を描くことにより、人間の力が到底及ばない自然の猛威に対する恐怖を表現している。常日頃から自然を愛で、細かな観察をしていた主人公（ヘッセ）だからこそ感じた、嵐（大暴風雨）が来る前の、静かに進行する幾つもの予兆が不気味さを強調する。

²³⁵ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第5巻）』 p.369

²³⁶ 同上 p.192

²³⁷ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第7巻）』 p.319

²³⁸ 同上 p.378

本文中では、自宅近所の紡績工場を取り巻く環境や、大旋風が襲った工場（の従業員達）の描写もみられる。時期的には丁度、ヘッセが機械工の仕事に嫌気が差してきた頃の実際の体験を基にした作品である。

『クヌルプ』（1915）、『ナルツィスとゴルトムント』（1930）

両者とも遍歴職人を主人公とした長編小説である。『クヌルプ』²³⁹の方は、初恋がきっかけで職人となり、失恋してその傷がなかなか癒えぬまま放浪、職人として遍歴に身を任せてそのまま人生を終える男の話である。『ナルツィスとゴルトムント』²⁴⁰は修道院で修行を始めた少年ゴルトムントが途中から芸術に目覚め、修道院を辞めて遍歴の旅に出る。欲望の赴くまま旅先で放蕩しながらその芸術性に磨きをかけ、最後の一職人として自分自身と向き合いながら木彫作品に命を削る。そして心の支えとなり、その予知能力でゴルトムントの運命を導くのが今や修道院の指導者で、互いに思いを寄せ合う友人でもある、ナルツィスである。

二つの作品とも主人公が最後に死を迎え、その際に宗教的境地に至るのであるが、一方で、両作品の主人公二人の自由奔放な欲望に導かれた人生に対し、堅実に道を踏み外さずに歩む人物たち（『クヌルプ』では登場する数人の親方や職人たち、『ナルツィスとゴルトムント』ではナルツィスと木彫師のニクラウス親方がそれに当たる）を描き、主人公とこれらの人物とを対比する形にもなっている。それに加え作中では、一見して人生の落伍者のような主人公たちの生涯も神にとっては愛おしいものであり、人間一人ひとりに神から役割として与えられたそれぞれの人生があるのだ、ということ語っているものと思われる。その点で、二つの作品は共通している。

これら小説では、遍歴職人の旅の道中や生業、受け入れ先の家庭や職人の^{こうば}工場の様子などが描かれている。『ナルツィスとゴルトムント』では中世の時代に発生したペストの大流行（「ドイツでは1348~9年の2年間に人口の三分の一が死亡した」²⁴¹）の様子も書かれている。加えて、ニクラウス親方の工場の描写を通して、マイスター審査制度の仕組み（話の中で雇入れたゴルトムントの能力を見込んで試験を受けさせようとする）や、マリアブロン修道院（かつてゴルトムントもナルツィスと共に院内の生徒として過ごした）の院長に出世したナルツィスの提案によって、職人として成長したゴルトムントを院の専属職人として雇入れるなど、教会と職人との雇用契約についても述べられている。

²³⁹ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第8巻）』 p.155

²⁴⁰ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第14巻）』 p.1

²⁴¹ 同上 p.328

〈V〉 総括

〈IV〉で検証したように、ヘッセは職人に関する作品を多く手掛けているが、職人の歴史的事実についても小説の内容からかなりの裏付けをとることができる。『クヴォールムの物語』でも述べたように、ヘッセは町工場を辞めた後も歌（詩）や伝承の収集を通して職人についての情報を集めた。ヘッセの数多くの作品のうち、職人小説の占める割合は、全体の半数に及ばないものの、相対的にみてこれ程多くの職人を描いた作家は稀であると思われる。少なくともヘッセにとって機械工見習いの経験はヘッセの作家人生に大きな影響を与えたと言えるのではないだろうか。井手氏によればヘッセは『クヴォールムの物語』において、

私がこの断片を今日公にするのは、その中に特に、ドイツの民衆のある断面、すなわち手仕事と手仕事職人氣質というものが記述されているという理由からである。それは私の少年時代や徒弟時代にはまだそれに先立つ数百年と殆んど同じ形で、同じ習慣をもって生きていたのであるが、やがて消滅してしまったものである。²⁴²

と書いているという。つまり、ヘッセは「手仕事と手仕事職人氣質」がドイツの民衆の間で既に消滅したことを認識し、時代と共に人々からその慣習が失われてしまうことを恐れ、「私がこの断片を今日公にする」つまり、自分の作品に書き記し、後世に残そうと考えた。ヘッセは、失われた「手仕事と手仕事職人氣質」に認めた遺産的価値を後世に伝えなければならないと感じたのである。ヘッセをそこまで突き動かした彼の思想的背景は何か。そして、小説に登場する職人の生き様から我々は何をくみ取れば良いのか。地域をはじめ共同体を担う後世にヘッセが書き残そうとした示唆とは何だったのか、という点を考えながら、本論文の結論を探っていく。

〈敬虔主義の影響〉

ヘッセ家は宣教師の家系であり、熱心な敬虔主義の信者であった。敬虔主義とはルター派の流れを汲むプロテスタンティズム（宗教改革により生まれた新教、又はそれらの総称。キリスト教の禁欲の精神に基づく「天職理念」が特徴。産業革命以来目覚めた「資本主義精神」と科学の進歩による「合理主義精神」を取り込み、小市民層の中でも職人層がプロテスタント＝新教徒の中心となる）²⁴³の一宗派である。

²⁴² 井手 p.302

²⁴³ M.ウェーバー pp.267-68

元々は同じルター派のプロテスタント正統主義から派生したものであるが、この正統主義が教条主義（聖書の教義を絶対とする）に傾いていることを批判したシュペナー（Philipp Jakob Spener 1635-1705）が17世紀に、本質的信仰を重視することを提言し、個人の内面に敬虔であることを求めて創始したものである。しかし、元来プロテスタント正統主義の分派である故、基本的に聖書の教義に基づく点は変わらない。

特にカルプを含むヴュルテンベルク州は敬虔主義の伝統が強く、信者に求められた「生活に根ざした信仰姿勢」²⁴⁴はヘッセ家においても例外ではなく、「一家の信仰の厳格な掟は、子供に厳しい良心を植えつけることに熱心であり、子供に生まれつきの性向や素質、意欲や伸びようとする力を疑問視し、天才や才能や個性の発揮を許さなかったのである」²⁴⁵。このことから日々の生活は信仰を中心とし、子ども達に厳しい躰が行われていたようである。この幼少期から積み重ねられた反発の感情が、ヘッセの青年期の反抗心をより大きく育てる要因になったのであろう。両親はいずれ、ヘッセも（祖父や父親同様）牧師になることを望んでいたが、ヘッセの強烈な個性（勿論母マリーは早い時期からそのことを認識していたが）を制御することは容易ではなかった。その為、まさに『車輪の下』のハンスのように神学校で脱走事件を起こし、級友との激しい喧嘩騒ぎを起こしたり、自殺をほのめかして周囲を慌てさせるなど、その奔放さに両親は散々手を焼いた挙句、結局彼を牧師にするのを諦める。

しかし敬虔主義の教えは、ヘッセ自身の宗教観の基礎となっていることは本人も認めており、その後も「アッシジのフランチェスコ」を敬愛するなど独自の信仰を深めていく。但しその間も、「改革されたピューリタン(清教徒)信仰は自我の献身を求めるが、それができる者はごく少数しかいない」、「自身の自我、自身の衝動願望を犠牲に捧げることを私はめったにしかできないし、したとしても不完全にしかできない」²⁴⁶と告白し、「改革の色合いを帯びたどの宗教も劣等感を抱かせる悪しき祭式（ヘッセいわく、例えばプロテスタントの僧侶は長く骨の折れる説教をして司祭の風格を示さなければならない等）を育てるのである」²⁴⁷とプロテスタンティズムや改革的な新興の宗教を実践する困難さを吐露している。そして、次第に彼の思想は教義や教会を超越し「Eigensinn」（[アイゲンズィン] 本来の意味は「我意」、「我儘」だがここでは訳者、田中裕氏の造語で自己の信念を貫く意味の「愛我心〔あいがしん〕」を用いる）²⁴⁸を尊重する神秘主義的傾向を持つようになる。後にニー

²⁴⁴ 宮崎 p.68

²⁴⁵ 田中裕 p.38

²⁴⁶ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第2巻）』 p.23、（ ）内は本論文著者による。

²⁴⁷ 同上 p.23、（ ）内は本論文著者による。

²⁴⁸ 田中裕 p.56

チェの意見に共感を抱いていたが、それもこの思想が影響しているようである²⁴⁹。その後、東洋（インドや中国）の思想にも興味を持つが（祖父や両親がインドと関わりがあったという理由もあるが）、晩年はカトリシズムについて「カトリック教会が改革された教会に勝り、神々の崇拝が仏教に勝っているのは、美意識や具象性や祭式の豊富な形式などだけではない。それはとりわけ思考の柔軟性と可塑性であり、はるかにより大きな順応力である」、「カトリックの礼拝はいついかなる時でもできるし、カトリックの僧侶は祭服をまといさえすればすぐ司祭になれる」²⁵⁰と述べてもいる（ナチスのプロテスタンティズムへの反発もある）。最終的には生涯を通じてキリスト教信仰の路線は保ちながらも、「私の宗教生活においては、キリスト教、それも教会的キリスト教というよりむしろ神秘的キリスト教が、唯一ではないにしても支配的な役割を果たしている」²⁵¹とプロテスタンティズムとカトリシズムそれぞれの長所を認めながら両者の間で常に葛藤しつつも、独自の宗教観を希求し続けた。このように、ヘッセの信仰への飽くなき探究心は生涯に亘って尽きることがなかったのである。

『車輪の下』に登場するフライク親方も敬虔主義の信徒（敬虔派信者）であるが、先述の「[...]もし牧師が、聖書は人間の作りもので、うそだ、聖霊の暗示ではない、などといったら、わしのところに来なさい。そしてそのことについて話しあうことにしよう。いいかい？」の会話の場面の「聖霊の暗示」の表現からも、敬虔主義が神秘主義（敬虔主義はドイツ神秘主義²⁵²の影響を強く受けている）的性質を持つことが伺える。そしてフライク親方はハンスの前で牧師（当時のプロテスタント宗派の一部で聖書の教義を軽んじる傾向があったことを示唆）を公然と批判しながらも、その反面で日曜のミサでは大きな存在感をもって、周囲を圧倒する程の信仰心の篤い一面を見せる。小説の中では、時として周囲から疎まれ、変わり者扱いされながらも、実は終始物事の本質を見抜いていた人物として描かれている。そのことは、キリスト教の教義の原点に忠実であろうとする姿勢、つまり敬虔主義の基本の考え方が、フライク親方の世間体や権威に惑わされることなく一貫して真実だけを見、悟ろうとする姿勢にも表れている。

『クヌルプ』と『ナルツィスとゴルトムント』も同じく敬虔主義的思想が反映された作品といえるが、両作品の主人公は共に敬虔主義の厳格さからは懸け離れた生き方を選択する。しかし双方とも人生の最期に自分自身の中の神の存在に気づき、亡くなる間際にそれぞれ固有の神を体現することから、敬虔主義を超えたところに

²⁴⁹ 宮崎 p.73

²⁵⁰ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第2巻）』p.23

²⁵¹ 同上 p.274

²⁵² 13世紀後半に発生しドイツ哲学の基礎を成す。マイスター・エックハルト（Johannes Eckhart）など。

ある神秘主義と同時に「愛我心」がテーマとなっているものと思われる。寧ろ作者は、「愛我心」（前述のように直訳は「我意」、「我儘」）に従って生きる典型例として彼らに奔放な人生を設定したとも言える。また、その主人公達の生き様と、教会や教義を超越した神秘的な神を体現する場面は、アッシジのフランチェスコを彷彿とさせる要素もある。例えばヘッセは、「我がままな人にとってその掟は運命と神性を意味しているのである」²⁵³とし、次のように説明している。

私が大いに気に入っている徳が、一つだけある。それは我がままという名前だ〔…〕徳とは、服従である。問題はただ、何に服従するかという点にある。つまり、我がまかもまた服従である。しかし、他のすべての、とても人気があり称賛されている徳は、人間によって定められた掟に対する服従である。ただ一つ我がままだけは、この掟を問題にしない。我がままな人は別の掟、たった一つの無条件に神聖な（「私が言うあの『我がまま』を備えた人は、お金や権力を求めない」²⁵⁴）、自分自身の中の掟、「我が^{われ}まま」なる「心」に従うのである。²⁵⁵

このくだりから『クヌルプ』と『ナルツィスとゴルトムント』の中で、自分の気持ちに素直に従って「永遠の呼びかけに従い、自分に深く生まれついた自分本来の心の命ずるまま」²⁵⁶に生きた二人の主人公はまさに「愛我心」に忠実だったといえる。そう考えると、ヘッセは案外日頃から、遍歴職人の独立独歩の孤高の姿の背後に「愛我心」を見出していたのではないかとも思われる。エッセイ『菩提樹の花』の中では

ああ、遍歴職人よ、楽しい軽薄男たちよ、私はおまえたちのうちの誰でも、たとえそれが五ペニヒをめぐんでやった相手だったとしても、敬意と賛美と嫉妬の気持ちをいだいて、王様を見送るのと同じように見送る。おまえたちは皆、最も身を持ち崩した者であっても、目に見えない王冠をかぶっている。おまえたちは皆、幸せ者で征服者だ。私もまたおまえたちと同じだったし、遍歴とよそ者の味がどのようなものかは知っている。郷愁と困窮と不確実さにもかかわらず、非常に甘い味がするのだ。²⁵⁷

²⁵³ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第2巻）』 p.243

²⁵⁴ 同上 p.241、（ ）内は本論文著者による。

²⁵⁵ 同上 p.238

²⁵⁶ 同上 p.239

²⁵⁷ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第5巻）』 p.91

この文章をみても、ヘッセは放浪癖のある自分の姿に重ねながらも遍歴職人にとでも強い愛着を感じていたことが分かる。つまり少なくともこの作家にとって遍歴職人は「愛我心」を描く為に、必要不可欠な、そして愛すべき存在であったことが理解できる。

＜「愛我心」が引き寄せる自我の中の神＞

また、ヘッセはこうも言っている「神は自我の中にある」²⁵⁸。これはインド思想や、フランスの哲学者アンリ・ルイ・ベルクソン (Henri Louis Bergson 1859-1941) に共通する哲学であるとした上で、ヘッセもこれと同意見であると述べている²⁵⁹。『デミアン』(1919)では主人公の内面に於ける自身(或いは他者)との対峙が主題となり、『荒野の狼』(1927)も内面の葛藤を描いた作品である。特に『デミアン』では敬虔主義の神秘思想やユング心理学の影響が見えつつも、最終的にはこれらの作品も「愛我心」を描いたものと言えるが、前述で「一つの無条件に神聖な自分自身の中の掟、我がままなる心」^{われ}、「その掟は運命と神性を意味している」と説明されている「愛我心」に服従すること、つまり「我がままなる心に従う」とは(単なる「我がまま」を意味するのではないとすると)具体的にどういうことなのか。

井手氏によれば、ヘッセは自我を「主観的な、経験的な、個人的な」²⁶⁰第一の自我と、高い意識からくる第二の自我「高い自我」²⁶¹に区別し、誰もがこの二つを同時に持っているという。

この第二の自我は、第一の自我の中に隠されており、その自我とまざりあっているが(通常両者は混ざり合っている)²⁶²、しかし決して(両者を)²⁶³とりかえることはできない。この第二の、高い、聖なる自我(インド人がブラーマ即ち梵天と同等のものを見なしているアートマン即ち真我)は、個人的なものではなくて、神へ、生命へ、全体へ、非個人的、超個人的なものへの我々の参与である。²⁶⁴

と説明する(ちなみに、^{ブラーマ}梵天=梵とはインド古代宗教の^{ぼらもん}婆羅門教に於ける「バラモ

²⁵⁸ 『ヘッセ魂の手紙』p.108

²⁵⁹ 同上 p.108

²⁶⁰ 井手 p.592

²⁶¹ 同上 p.592

²⁶² ()内は本論文著者による。

²⁶³ 同上

²⁶⁴ 井手 pp.592-93

ン思想の中心概念。宇宙の根本原理、あるいは最高神」²⁶⁵を意味し、後で述べる「全体」あるいは「全一」と同義、^{アトマン}真我は「サンスクリット語では、元来『息』の意味であったが、のちに『生命』『個我』『自己』の意味をもつようになった。インド哲学では『魂』を指し、〔…〕梵に照応する〔…〕個我の本体〔…〕」²⁶⁶を意味し、ここでは第二の自我を指す)。つまり「Eigensinn アイゲンズィン」の従来の意味（我がまま）から考えると矛盾しているようだが、第二の自我とは個人の持つ全ての利己的エゴイズムと対局に位置する自我のことであり、それは「高い意識」からくるものでなければならず、両者が混ざり合った（通常第一、第二は混ざり合っている）自我の中からその「高い意識」＝「第二の、高い、聖なる自我（第二の自我）」を認識し選択して、それに従うことが「我（われ）がままなる心」＝「愛我心」に従うということなのである。更にヘッセによると

イエスの教えや老子の教え、ヴェーダ（バラモン教の経典）の教えやゲーテの教えは、永遠に人間的なるものをとらえている部分においては、同じ教えなのだ。ただ一つの教えがあるのみである。ただ一つの宗教があるのみである。ただ一つの幸福があるのみである。数多くの形式があり、数多くの告知者がいるが、ただ一つの叫び、ただ一つの声があるのみである。神の声はシナイや聖書からやって来るのではない。愛や美や神聖さの本質は、キリスト教や古代ギリシア・ローマ文化やゲーテやトルストイにあるのではない——それはあなたの中に、あなたや私の中に、我々一人一人の中にあるのだ。これは、古い、唯一の、常にそれ自身において同じ教えであり、我々の唯一の、永遠に妥当する真実である。それは、我々が「我々の心の中に」持っている「天国」の教えである。

267

そして、「人は自分自身の中のこの第二の自我へと沈潜すべきである。すべての人がその人独自の運命の道を歩むのであるが、その独自の運命を認識するもののみが意志の自由を自覚し得るのである」²⁶⁸と述べている。つまり第二の自我＝真我を自覚したものこそ、愛と善を行うことができ、反対にその者の行いが「愛我心」からみて愛と善でないのであれば、傍からみてもその者が選択し従った第二の自我は明らかに真我（本物の第二の自我）ではないのだ。そして、その行いの外観がたとえ悪くても、それが真我から出る答えに則った「愛と善」の結果であるならば体裁がどうあれ肯定すべきなのだということである。しかも井出氏によれば、ヘッセは

²⁶⁵ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第12巻）』 p.121

²⁶⁶ 同上 p.121

²⁶⁷ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第8巻）』 pp.122-23、（ ）内は本論文著者による。

²⁶⁸ 井手 p.593

こうも述べている。

生命にとってはどんな基準も存在しないのです。生命は各人銘々に、それぞれ別の、ただ一回かぎりの使命を課するのです。従って生命にとって先天的な、前もって定められた役立たずというものは存在しません。どんな弱い人も、どんな哀れな人も、その立場に於てそれにふさわしい、正当な生活を行ない得るのです。そしてその人が、人生に於けるその人の、自分で選んだのでないその場所とその特別な使命を受けとり、それを実現しようと試みるというただそれだけのことによって、他の人々に意味あるものとなるのです。これこそ本当の人間の存在の意味なのです。²⁶⁹

このことは、第二次世界大戦でナチスが遺伝的優生学に基づいた医療殺人やユダヤ人、反社会的分子の殺害を実行したことに對し、ヘッセがどれだけ怒りを持って、心を痛めていたか想像するに難くない。彼のこの怒りや心痛が政治的な感情ではなく、人間的感情から出たものであることは下記からも読み取れる。

[...] 私は心をこめて、抑圧された者、処罰された者、つまり被虐待者、捕虜、ユダヤ人、被追放者の立場に立つ。ただしこのことは、私が亡命者のメンタリティーと無条件に一致しているということではない！私はこの党派にも他の党派と同様に組みすることはできない。²⁷⁰

現にヘッセの三人目の妻ニノンユダヤ人であり、ヘッセ自身もナチスの選民思想に基づく反ユダヤ主義や人口削減計画に反旗を翻していた一人なのである。人にはどんな境遇であっても一人一人にそれぞれ特別な使命があり、各人のその為の試みは他の人々にとっても意味のあるものとなる、ということは、たとえ一人の命さえ抹殺することがどれ程人類にとってマイナスになるのか、ということをお訴えているものと思われる。その思いは下の文章にも込められている。

[...] 私が第三帝国に対して持つ拒否と反対は、あらゆる帝国に対する、あらゆる国家に対する、個人の大眾に対する、質の量に対する、魂の物質に対するあらゆる暴力行使に対して抱く拒否と反対以外の何ものでもない。²⁷¹

²⁶⁹ 井手 pp.593-94

²⁷⁰ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第2巻）』 p.70

²⁷¹ 同上 p.72

そしてまた、真我は「自然」の中にも同等に存在するとヘッセはいう。『デミアン』のはしがきには、

だれでもみな、自分の誕生の残りかすを、原始状態の粘液と卵の殻を最後まで背負っている。ついに人間にならず、カエルやトカゲやアリにとどまるものも少なくない。上のほうは人間で、下のほうは魚であるようなものも少なくない。しかし、各人みな、人間に向かっての自然の一投である。われわれすべてのものの出所、すなわち母は共通である。われわれはみんな同じ深淵から出ているのだ。²⁷²

と書かれている。ヘッセの自然に対する愛情は、自然の中に、真我＝神が存在することを意識したことと無関係ではないだろう。この中の「各人みな、人間に向かっての自然の一投」については、エッセイの中でこうも記している。

涅槃は、私が理解するところでは、個が分割されていない全体へ復帰すること、固体化の原理の背後へ帰る救いの歩み、つまり宗教的に表現すれば個々の魂が全一の魂へ、神へ復帰することである。[...] 神が私をこの世へと投げ入れ、個人として存続させているのなら、できるだけ速やかにすぐにまた全一に戻るのが私の使命である [...]。²⁷³

このことから、ヘッセが生涯自然を愛し続けたのは、自然に存在するあらゆる生命の中に真我＝神を求めていたからだ、とすれば納得ができるのである。そのことは次にも説明されている。

私たちは、自然を単に実りをもたらすとか有用だとかいうだけでなく、美しいと思わなければならないが、また美しいだけでなく、計り知れず、美醜を超越して崇高だとも思わなければならない。私たちは探し求めるのではなく、見出さなければならない。判断を下すのではなく、見て理解して、吸い込みそして取り入れたものを消化しなければならない。森からそして秋の牧草地から、氷河からそして穂の出た黄色の穀物畑から、すべての感覚を通して私たちの体内に命が流れ込み、力が、精神が、心が、価値が流れ込むのでなければならない。ある風景の中を歩いて旅することは、私たちの内部の最高のもの、すなわち世界全体との調和を促すのでなければならない。だがそれは道楽でも渴望で

²⁷² 『デミアン』 高橋 p.9

²⁷³ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第2巻）』 p.29

もあってはならない。私たちは、何らかの利害関係によって、山や湖や空を眺めたり値踏みしてはならない。私たちと同様に全体の一部であり、ひとつの理念の現象形態としてのそれらの間で、感覚を研ぎすませて活動し、そこをわが家と感じなければならない。ひとりひとりが自分に特有の能力を用い、自らの教養に備わった手段を用いて、ある者は芸術家として、ある者は自然科学者として、またある者は哲学者としてふるまうべきなのだ。私たちは自分自身の本質が、肉体的本質に限らず、全体と親密に関係し、全体に組み入れられていることを感じなければならない。そうやって初めて、私たちは自然との本当のつながりを持つのだ。²⁷⁴

ヘッセはここでも、自然の中の生きとし生けるもの総てが全体（全一）と繋がっており、切り離すことができない関係性の中で生かされているという見解を強調する。『シッダールタ』の一節に、「[...]世界の万物を、隙間のない、水晶のように明晰な関連をもつものとして、偶然にも左右されず、神々にも左右されない完全な関連をもつものとして把握する [...]」²⁷⁵、また同じく、「[...]世界の^{いちによせい}一如性、万物が互いに関連をもつこと、大きなものも小さなものもすべてのものが同じ流れに包括されていること、つまり、原因、生成、死滅という同じ法則に支配されていること [...]」²⁷⁶と説明されている。この文中の「一如性」とは「宇宙に遍在するあらゆるものは、現れ方はさまざまであっても、根本は一つであること、一体であり、不可分であること」²⁷⁷を意味する。以上の引用から、少なくともこれら自然の要素のいずれかに危害を加えることは、全体と繋がる自らをも傷つけることになってしまうという法則（「原因と結果の結合した一つの永遠の鎖」²⁷⁸）が理解できる。なぜなら、先のエッセイの引用文でも、自然は「私たちと同様に全体の一部であり、[...]そこをわが家と感じなければならない」、「私たちは自分自身の本質が、肉体的本質に限らず、全体と親密に関係し、全体に組み入れられていることを感じなければならない。そうやって初めて、私たちは自然との本当のつながりを持つのだ」とあり、しかも既に「各人みな、人間に向かっての自然の一投である。われわれすべてのものの出所、すなわち母は共通である。われわれはみんな同じ深淵から出ているのだ」という前提が提示されていることから、自然が人間と同様に全体（全一）に繋がっているのは勿論のこと、その深淵つまり発生源も我々と同じであることが分かる

²⁷⁴ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第5巻）』 p.115

²⁷⁵ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第12巻）』 pp.27-28

²⁷⁶ 同上 p.28

²⁷⁷ 同上 p.122

²⁷⁸ 同上 p.27

(寧ろ各人が自然の一投であるならば、その自然の一投がなければそもそも初めから人間は存在しないことになる)。以上のことから、万一自然が傷や痛みを受けた場合も、病んだ一部を全体から完全に切り離すことは不可能であり、一部の傷や痛みは深淵全体に影響を及ぼすだけでなく、いずれは深淵とつながっている我々個人に跳ね返り、自然が負った傷や痛みを遅かれ早かれ個人も同じように負うことになる、という理論が成り立つ。よって前引用からも、「私たち」はこの自然との関わり方をそれぞれ的手段で見出し、利害関係を持ち込まず、常に繋がりを意識しながら自然と調和していくことが必要であると理解できるのである。ヘッセは、「叡知とは、生きているあらゆる瞬間に『一如』の思想を考え、『一如』を知覚してそれと共に生きられるような心構え、心の能力、各個人がもつ技能以外の何ものでもなかった」²⁷⁹と、作品中(『シッダールタ』)の主人公シッダールタの心中に語らせている。

結局、ヘッセが晩年自然の中に埋没する傾向にあったのは、自然そのものを理念(Idee)の現象形態として捉え、自然の中に真我を感じとることで彼自身が支えられていたからかもしれない。

<反戦と愛我心>

ヘッセは、産業革命が生んだ帝国主義が導因となった第一次世界大戦の後、そして第二次世界大戦前後において、国家主義や全体主義の危険性を警告する。『車輪の下』やノーベル文学賞を受賞した『ガラス玉遊戯』では、国家体制教育を暗に批判するメッセージを作品の中に織り込んでいる。しかも、その後も続けて他の評論等で反戦や平和の主張を行ったことで、当時の(ドイツ)国や国民から非難を浴び、同国中から非国民の扱いを受けることとなる。ヘッセは1912年からスイスのベルンに移り住んでいたが、ドイツに対しての愛国心が全く無かったからではない。実際は寧ろ自ら進んで第一次世界大戦の開戦直後に義勇兵に志願(結局のところ極度の近眼の為に不合格となる)し、第二次世界大戦中にもドイツ人戦争捕虜の救援(ドイツ人戦争捕虜図書センターの文芸主任となり、捕虜収容所に図書を送る事業に関わる)を行ったのである²⁸⁰。ヘッセの国籍は既にスイス国でありながら(ヘッセの家族は伝道に関わっていた為、元々の国籍が皆ばらばらであった)ナチス政権とその政策には断固反対しつつも、故国ドイツを想う気持ちは他のドイツ国民と少しも変わらなかったといえる。しかし残念ながら、これらの献身的姿勢にも拘らず、「反戦平和主義者」及び戦後は「軟弱文士」²⁸¹のレッテルを貼られ、ヘッセの作品はド

²⁷⁹ 『ヘルマン・ヘッセ全集(第12巻)』 p.104

²⁸⁰ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集(第8巻)』 pp.357-61

²⁸¹ 『ヘルマン・ヘッセ全集(第4巻)』 付録第一号、小塩 p.3

イツ国内ではあまり読まれなかったのである。むしろ、早くから正当に評価していたのは日本とアメリカ（60年代）であったと言われ、最終的にドイツへはアメリカからの逆輸入でもたらされたと言われている。²⁸²

ヘッセの反戦姿勢は、国家への批判から次第に国民個々人の意識の問題へと向けられる。ここでもヘッセの考えの中心には「愛我心」がある。ヘッセは彼の日記の中で、学生から彼宛に送られた（ヘッセに対する）批判、憎悪の手紙に辟易し、「自分自身をほんの少し知るのに何と奇妙に長くかかることか——自分に対してイエスと肯定し、利己的な意味を超えて自分自身に同意するためには何ともっと長くかかることか！」²⁸³と、「愛我心」に従う為には時に「忍耐」と同時に「信念、神への信頼、英知、子どもらしさ、素朴」²⁸⁴の素養が必要なのだ、と書いている。そして、

私にとってずっと気がかりなのは、[...] 肯定的なもの（戦争に対するドイツ国内の肯定的な雰囲気）、気立てのよいドイツ人の内に生じている活気、当初は彼らをぎくりとさせた「革命」を彼らが受け入れていること、つまりは帝国における祖国愛の今日的な形式に対して私の理解が欠如していることが気がかりなのである。なぜ物静かな、まじめな、特定政党に属さない人たちが[...] この革命をいま肯定するのか、なぜ彼らはこれを戦争状態、非常事態と認めて、協力者としてであれ、あるいはまた犠牲者としてであれ、進んでその意のままになるのかを知りたい、と躍起になる（ヘッセ自身が）。²⁸⁵

なぜ帝国内の清廉で、信頼の置ける、まともでけっして卑劣ではない人々までもがほとんど大部分、盲目的で好戦的な愛国心に、その挫折をつい先年経験したばかりだというのに、こういう新しい形で同意し加わるのだろうか。²⁸⁶

と嘆いている。

しかし、これらの人々の革命や戦争、暴力的な行為に対する盲目的な同意や肯定はかつてのドイツ国民に限ったことではないことは数多の歴史や科学的実験が証明している通りであり、我々は誰もがいつの時代においても常に誤った選択をする可能性を秘めていることを思い知らされるのである。よって、「自分に対してイエスと肯定し、利己的な意味を超えて自分自身に同意する」²⁸⁷こと、つまり個々人が自分

²⁸² 『ヘルマン・ヘッセ全集（第4巻）』付録第一号、小塩 p.3

²⁸³ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第2巻）』p.17

²⁸⁴ 同上 p.17

²⁸⁵ 同上 p.61、（ ）内は本論文著者による。

²⁸⁶ 同上 p.62

²⁸⁷ 同上 p.17

の中の真我（＝神）に目覚めることが如何に大切であり、「愛我心」に従うことでかつての第二次世界大戦時のような全体主義や時の体制、時流に流されることなく、事の真実や本質を見極め（例えばフライク親方のように）、現実の問題点を認識し、以後の正しい選択を模索、あるいは決断していくという過程が必要不可欠であるということは、これまでの「愛我心」の説明から十分に理解することができる。このように不義の権力者や世論の多数意見に闇雲（自分の頭で考えることをせず）に同調することなく、それぞれが「愛我心」を保ちながら個人で自律した（主流な世論の渦中から時に物理的或いは精神的に距離を置いてみて）判断や感情を持って、社会の中で互いに修正し合うことこそ最終的に世の中を正しい方向に向かわせるということになる。但し言うまでもなく、この際の力の行使は長い目で見て無意味であることは明白であり、ヘッセも次のように述べている。

〔…〕すべての、例外なくすべての暴力の形態は「世界」の事柄であって、暴力と暴力行使への野望はこの世では常にありとあらゆる形式の下で行われており、たとえその正当化のために無数の「精神的な」論拠を弄しようとも、これは本能の事柄であって、けっして精神の事柄ではないのである。²⁸⁸

この点で考えると、ヘッセが信仰の変遷を辿って得た答えは反戦のみならず、広い意味において平和の礎になり得る可能性もある。

この「愛我心」の観念は、体制や組織に縛られず遍歴の習慣を通して「榮譽」を築き上げてきた職人達の理念に重なるものでもある。ドイツの民衆の中から発生し、社会の中で自分達の自律を守りながら、やがて国民思想の基礎を築き上げるまでになる職人の「誇り」は、「遍歴」の習慣が消えた今も共同体の伝統として人々の心に受け継がれている。ヘッセ自身は直接そのことに触れてはいないが、職人達の精神的、社会的自律に裏打ちされた理念は「愛我心」を見事に体現したものである。

このようにドイツの職人たちの「榮譽」の遺産は、今もドイツ国民の中に血脈となって流れ続けているのである。第二次世界大戦でナチスのみならず、国民全体が誤った選択を支持してしまったことをドイツの人々は今でも忘れないが、同国民のみならず世界の心ある人々はそれぞれ自国の問題に立ち返り、今後の教訓に据える段階で気付かぬうちに「愛我心」の観念と向き合っている、または向き合わざるを得ない状況に立たされているともいえるであろう。

一つのが、この本当に善良なドイツ人のすべての発言に共通している。

²⁸⁸ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第2巻）』 p.63

即ち、少し遅すぎたが今や民主主義の諸民族からドイツ国民に向けられている、あの啓蒙的な、懲罰的なお説教の論調に対するきわめて鋭敏な感受性である。そのお説教を唱える論説や小冊子の一部分は、手際よくまとめられて占領国によって喧伝されている。これは C.G.ユングの、ドイツの「共同責任」に関するエッセイに対しても行われた。そして、目下のところこういった論説をそもそも聞く耳を持ち、学ぼうとしているドイツ国民の唯一の層は、驚くべき鋭敏さでもってこの論説に反応している。疑う余地もなく、この説教は非常に多くの点において、全く正しい。ただこの説教はドイツ国民²⁸⁹には届かず、まさに最も純粹で気高い人々に届いている、そしてそのような人々にあっては、良心はとうの昔に十分すぎるほど目覚めているのである。²⁹⁰

未熟な人間（殆どの人間が生来未熟な存在であると仮定して）が過ちを犯すのは当然であり、肝心なのはそこで学習をして、そこからどう人間的に成長できるか否かなのである。その点でドイツは大きな痛手を負ったものの爾後の覚醒を促す力となる大きな精神的後ろ盾を文化的背景の中に既に確保しているのである。ヘッセは呼びかける。

私は君たちにまさに声を大にして呼びかけたい。挫折が諸君にもたらした数少ない幸いを、再び逸するなかれ！ 1918年のあの時、諸君は悪しき憲法を備えた君主制の代わりに、一つの共和国を我が物とすることができた。そして今、悲惨さのさなかにあつて、諸君は再び何かを我が物として体験することができる。すなわち戦勝国や中立国に先んじて諸君が有している新しい発展と人間性のいくばくかである。諸君は、本当はもうとっくに諸君が憎んでいるあらゆるナショナリズムの狂気を見抜き、それから自由になることができるのだ。[…]
この歩みを完全に最後まで歩み通したまえ。そうすれば、少数の君たちよ、自国民にも、そしてほかのどんな国民にも人間としての価値という点において優り、タオ（道）に一步近づくだらう。²⁹¹

<「個性化」と共同体の共存>

ヘッセはゲーオルク・ラインハルトに宛てた手紙の中で、作品では「愛我心」に

²⁸⁹ 一部の目覚めた少数の人々を除く大多数のドイツ国民。

²⁹⁰ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第2巻）』p.117

²⁹¹ 同上 p.118

従って生き、「個性化への道」²⁹²を表現したいとも言っている。

あらゆる集団的なものや権威にしばられたものから導き出し、内面の声（良心もですが）を非常に個人的で敏感なものにし、生を極度に細分化して困難なものにする道なのです。——こういったことを私は経験してはいるのですが、まだその真っ只中にひっかかっているのです。²⁹³

そして更に、「細分化された個体を全体へと、社会や共同体へと再び組み入れることは、私自身がこの道をもっと先へ進んでからでないと、描くことができないでしょう」²⁹⁴と書いている。つまりヘッセは「個性化」について追求した結果、その人物が孤立してしまうことなく、最終的には社会や共同体の中に溶けこんで、個々人がそれぞれの「愛我心」により突き動かされる能力をそれぞれの形で発揮できる姿を描きたかったのではないかということである。ヘッセ自身、非国民呼ばわりされて故国から孤立し、その後も集団の心理や思想に流されることを極力避けて暮らしてきただけに、客観的に社会や共同体が「細分化された個体」を受け入れる姿を想像することが困難であったのかもしれない。現に作品『帰郷』（1909）では、共同体での異質な個性の受容の難しさが描かれ²⁹⁵、『東方の旅』（1932）²⁹⁶では「共同体の探求」というテーマで「結社」と関わる個人の葛藤を描いている²⁹⁷。これらのテーマについてはヘッセの時代に止まらず現代社会においても、人間の多様性を受け入れるという点に関して問題が全て解決しているとは言えない。言葉や宗教、人種や考え方の違いを超えて、人々がそれぞれ個々人の個性を受け入れ、社会や共同体が個人の「個性化」を排除しないということは、今後も課題となり続けるであろう。

しかし、与えられた社会や共同体に「受け入れられる」というよりも、むしろ社会や共同体を「個性化」によって「形成する」という逆の発想も可能な筈である。14世紀に発生した、職人達による同業組合である「職人組合」は職人がツンフトの排他性により締め出されることに対抗して結成されたものであった。その後、職人組合の存在はツンフトをも脅かし、親方たちの権威主義的内輪体制の改革にも影響を及ぼすこととなる。その職人達の誇りを支えていたのは「遍歴」の栄誉であり、その「遍歴」によって職人達は自律心を養い、あらゆる場所で得た経験は職業的技術力の研鑽のみならず精神的、社会的な人間形成に役立ったとも言える。今でこそ

²⁹² 『ヘッセ魂の手紙』 p.109

²⁹³ 同上 p.109

²⁹⁴ 同上 p.109

²⁹⁵ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第6巻）』 pp.77-111

²⁹⁶ 『ヘルマン・ヘッセ全集（第13巻）』 pp.225-85

²⁹⁷ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第3巻）』 pp.116-17

「遍歴」の習慣はなくなったが、その積み重ねた「誇り」はドイツ国民の精神となってドイツの現在の産業（工業）、そして手工業マイスターの高度な教育制度を根底から支えていると言えるのである。

その「誇り」は歴史を越えて受け継がれ、田中洋子氏によれば、「最もものづくりに熟達しているマイスターこそ、人間的価値が高い人物と見なされる伝統」²⁹⁸を築き、「価格と技術水準の統制を通じて、生産と生活の安定を得た上で、手工業は、生産の効率よりも、ものづくりの過程そのものの中に人間的向上を見出すという価値観を社会的に定着させた」²⁹⁹のである。そこで必要となったのが、「遍歴」の代わりに職人の「誇り」を支える為、マイスター制度をしっかりとした教育システムの基盤の上に構築することであった。それは、ツンフトがかつて実施した、中世時代の閉鎖的で排他目的の、縁故を頼りとした資格の認定制度の欠点を克服し、より客観的で公平な仕組みを取り入れた職人教育制度の充実である。これを共通の認識とした新たな教育システムの構築は、長い目で見て後の、ドイツ国内外において高い信頼を得ることとなるマイスターの社会的地位を確立し、その相乗作用で現場に質の高い人材を呼び入れ、その為になら教育関係者にも高い知識と高度な技術力を結集させ、その結果として高度な専門分野の養成機関を社会システムの中に定着させるといった、一連の複合的な正の効果で、質の高い人材育成の好循環を実現させたのである。それは同時に、「『作った者の精神によってもものに魂が吹き込まれる』ことに何より価値を置く一種の哲学」³⁰⁰を育て、「『自分達の技能こそが都市を豊かにする』という、誇りに満ちた独特の労働観」³⁰¹を今現在に繋げているのである。そして現在、「遍歴」に代わる社会的信頼性の高い教育養成課程と資格認定制度によって堅固な社会的地位を確立したマイスターや職人達を中心となって地域をまとめ上げ、社会の下からの国民的合意を形成し³⁰²、今のドイツの地域社会の自治形態の基礎を作り上げたということはこれまで述べてきた通りであるが、ここで振り返ってみると、これこそヘッセが構想していた、「細分化された個体を全体へと、社会や共同体へと再び組み入れること」の原型といえないだろうか。

ヘッセは『ペーター・カーメンツィント』で、ペーターが彷徨の末故郷に戻り、年老いた父親の世話をしながら地域に溶け込んでいく姿を描いている。また、『昔の<太陽>で』では地域で引退後の職人を受け入れる様子が描かれ、『車輪の下』では地域の祭りや行事などに関わる職人の姿があった。こうしてヘッセの小説にも描かれているように、中世の時代から地域の自治や生活、福祉の一部として溶け込んで

²⁹⁸ 田中洋子 p.46

²⁹⁹ 同上 p.46

³⁰⁰ 同上 p.46

³⁰¹ 同上 p.46

³⁰² 川越ほか『社会国家を生きる』辻 p.67

来た職人達は、現在も尚それぞれの土地の中で継続して繋がりを持ち続けている。このように、地域の生活の場面では職人が歴史を通じて極自然に当たり前、光景の中に溶け込んでいるのである。

現代のマイスター達もかつての「榮譽」を掲げた職人達のように「遍歴」の習慣こそないが、技術教育のみならず経営や管理、法律などの知識、そして人格形成に至るしっかりとした質の高い教育を受けることで、社会的地位を確実なものとしている。そうして現在も「遍歴」に代わる「高度な専門教育の習得」という「榮譽」を誇りとして身に着け、マイスターの卵達の個体は再び地域の中核として共同体や社会に組み込まれ、地域共同体の生活にとって欠かせない存在となっていくのである。

<ドイツに於ける現代の共同体のかたち>

ドイツの共同体はその後も続く歴史の中で、商人や職人等の同業組合を基礎として更に進化を遂げる。19世紀の（第一次に続き第二次）産業革命と経済発展によって都市化が進み、共同体の仲間組織を中心として支え合ってきた人々の生活にも変化が起きる。今まで共同体として機能していた農村の人間関係が、都市の発展と企業の雇用増加による労働形態の変化により解体を余儀なくされるのである。しかしこのような状況の中で、人々は人間同士の新たな繋がりを求めて、それぞれ独自に「自主的組織、仲間団体としての協会、サークル、組合などの諸団体」³⁰³などを結成し始める。田中氏は次のように述べる。

〔…〕19世紀から20世紀にかけて急速にドイツ社会に拡大した自主的団体・協会の発展は、人びとの生活やアイデンティティの一つの中心となっただけでなく、ドイツにおける社会団体のあり方を規定し、現在につづく社会経済的・法的制度をもたらすことになる。³⁰⁴

そもそも、ドイツでは18世紀末～19世紀前半にかけて体制に対抗するかたちで自由主義的な啓蒙団体としての自主的団体が作られていた。1810年プロイセン政府による「営業の自由」の締め付けにより、ツンフトや職人組合は廃止に追い込まれる中、工場労働者による職業組合（フェアバンド、Fairbund）が結成されるようになる。そして、3月革命前期から1863年の間に更に、「労働者教育協会」が組織される。これは市民主導で進められ、「労働者の社会的・経済的・道徳的地位を向上さ

³⁰³ 若尾ほか『ドイツ文化史入門』田中 p.170

³⁰⁴ 同上 p.172

せ、尊敬される国家公民に育成することを市民・労働者共通の目的としていた」³⁰⁵ものである。1863年にはフェルディナント・ラサールによって「全ドイツ労働者協会」³⁰⁶が結成され、「普通選挙と国家援助による生産組合」³⁰⁷を要求する。この組織には労働者だけでなく、手工業者や商人などのあらゆる市民層も加盟できた。政治的活動として社会主義運動も活発になるが、1878年にはビスマルクによる社会主義鎮圧法が施行された為、活動家達は自分達の政治活動をカモフラージュする為に、協会の運営するサークル活動などを利用して、それぞれに啓蒙活動を進める。1890年以降、組織は「ドイツ社会民主党」となる。このような労働者を始めとする協会の設立は政治的組織に止まらず、プロテスタントやカトリックのキリスト教会によるものも数多く出現する³⁰⁸。

労働者協会の活動は時として市民から分離して発展する必要もあったが、生活基盤を共有する際にお互いにノウハウを提供しつつ組織としても次第に融合していった。特にワイマール期には労働者と市民の社会的格差が縮小し、文化の大衆化とともにこの流れが加速する。

このような流れで発達してきた自発的団体や協会は反面で生じがちな排他的、閉鎖的性質と葛藤しながらも³⁰⁹、後の現在に至ってその活動は地域の再生にまで及ぶようになり、行政も関与しながら様々な団体が地域の社会的ネットワークに参加(コミュニティ・ビジネスを含む)することで、コミュニティ(地域共同体)の包括的自主運営システムであり衰退市街地の再生の仕組みでもあるコミュニティ・マネジメントの役割分担を担うようになってきている。その内容は例えば、医療福祉・高齢者支援・環境保全・教育や乳幼児等の子育て支援・雇用促進・公共公益事業・地域安全・防犯・その他の分野など(ソフトからハード面まで)広範囲に及ぶ。³¹⁰

室田氏によると、コミュニティ・マネジメントの担い手としては、現在日本では通常、地域共同体の中心的役割を町内会や自治会、商店振興協会が担っているが、これらが単独で地域振興を進めるのではなく、できるだけ多くの関係者が多く参加することが地域全体の活性化を促すと述べている。

多くの関係者の関心を高め、問題意識などを共有することが必要であり、地域の関係者にできる限り声をかける。初期段階で重要なのは、多くの関係者の参加を促進すること、関心や意欲を高めること、地域の人々と問題意識などを

³⁰⁵ 若尾ほか『ドイツ文化史入門』田中 p.174

³⁰⁶ 同上 p.174

³⁰⁷ 同上 p.174

³⁰⁸ 同上 pp.174-89

³⁰⁹ 川越ほか『社会国家を生きる』辻 p.57

³¹⁰ 室田 pp.228-35

共有し相互啓発することである。参加促進とコミュニティ・エンパワメントのための事業などを仕掛けることが必要である。³¹¹

その際、日本の場合は上記の町内会、自治会、商店振興協会のほかにも、「まちづくり組織、NPO、団地などの管理組合」³¹²など要となる団体を中核（コミュニティ・マネージャー）に置き、広域からの様々な人々や団体が関与する際の運営に中心的に関わることで、共同体に結束力を持たせることが必要であるとともに、その役割は地域内に留まらず外部や他地域との連携を図る上でも欠かせないと説明する。勿論先にも述べたが行政は「広域的な連携体制をつくる」³¹³際に、「関連性のある企業や団体と協力関係を結ぶ」³¹⁴、或いは補助金を含めた必要な資金の調達などに於ける仲介など、その役割は重要であると主張する。このようにドイツが自発的団体や協会を中心に地域活性の為の機能を高めてきた過程や方法はドイツ以外の他の地域に於ける再生復興や地域運営のヒントになる可能性もある。

その他、ドイツの社会経済システムにみられる特徴として、「労働組合と経営者団体との団体交渉・協約制度、企業側と同数の労働者代表による労働者委員会・従業員代表委員会制度、また労働者代表と株主代表が同等の権利を持って企業の方針を決定する共同決定制度」³¹⁵など、経営者団体と同程度の発言権を持つ労働組合との関係が構築されている³¹⁶。田中氏によれば、

個人の自己責任努力とも、国家の社会政策とも、市場での利潤追求原理とも異なる、こうした自発的団体・協会の存在は、現在もドイツ社会において、人びとの思考・行動様式、社会への関わり方に大きな影響を与えていると考えていいだろう。³¹⁷

と述べていることから、ドイツの自治の基本となる自発的団体や協会の形態は長い歴史の中で培われ、今現在も形を変えながら地域運営や経済、労働システムに生かされている。現在ではそのような地域の自治が国の政策そのものに影響を与える例も少なくない。例えばそのことは、非営利団体や非政府団体が地域共同体の経済発展やエネルギー問題に貢献する例にもみられ、取分けドイツの再生可能エネルギーの普及には地域コミュニティによる自治の果たす役割が大きい。

³¹¹ 室田 p.238

³¹² 同上 p.237

³¹³ 同上 p.240

³¹⁴ 同上 p.240

³¹⁵ 若尾ほか『ドイツ文化史入門』田中 p.193

³¹⁶ 同上 pp.189-94

³¹⁷ 同上 p.194

これらドイツの地域の取り組み、または地域再生の仕組みの中に綿々と続く流れこそが、中世から続く共同体の伝統なのである。現在のグローバリズムに逆行するかのような、古い時代の、既に忘れ去られたかのようにも見える地域社会のコミュニティと結びついた産業や自治の形態こそが地域の活性化を促し、またそのような地域の自治運営や経済の自給自足的循環がもたらす地域の社会的、経済的安定こそが地域共同体に持続可能性をもたらすことを実証しているといえるだろう。

自給自足の循環については、フランスの経済哲学者・思想家のセルジュ・ラトゥーシュ（Serge Latouche 1940-）が提唱する二つの形態「脱成長」と、地域主義（ローカリズム）を中心とする「ポスト開発」の考え方³¹⁸にも一致がみられる。ラトゥーシュの「脱成長」と「ポスト開発」の意味するところは、いわゆる地域循環型の経済システムであり、それは「共愉の倫理ならびに量的には制限されるが質的に要求の高い消費を同時に再導入する」³¹⁹ことであると説明しており、そのことが「不正義をより生まない社会を構築する」³²⁰ことになるという。具体的には、「環境に対する負の影響とともに、地球における人間と商品の計り知れないほどの移動量を疑問視すること」³²¹、そして「[...] 凄まじい騒音を立てる巨大機械を休みなくより速く回転させることより他の理由をもたずに生産を繰り返し、そして使い捨て設備を矢継ぎ早に廃棄することを疑問視すること」³²²により、地域内において質に重きを置いた生産活動（生産や消費に対する意識の向上は不正義を修正する）を刺激し、それに伴い地域の健全な経済的自律を促すのである。このラトゥーシュの理論を更に先に進めて考えれば、その経済的自律は自ずと地域自治を活性化（住民の自主的参加意識の向上により不正に対する監視システムが機能し不正義をより生まない社会を構築）させる。そうして共同体が更に自律を進めて社会的地位を確立していけば、必然的に地方分権が高度化し、そのことがひいては国政を支え、最終的には国全体や社会全体の存続を可能にするという構図が見えてくるのである。

但し、ここで注意しなければならないのは、上で述べたような共同体の熟成期間を経ずして地方自治を運用した場合、つまり共同体内の経済的循環や自治の機能が十分に成熟仕切れていない状態では、共同体そのものが財政の悪化の積み重ねによる財政破綻などによって容易に崩壊してしまう（財政再建団体の例）可能性があることである。その点においても、ドイツの地域力は歴史によって熟成された下地が基礎となっていることから、先人の功績による非常に恵まれた条件の下で、地域住

³¹⁸ S.ラトゥーシュ p.100

³¹⁹ 同上 p.106

³²⁰ 同上 p.106

³²¹ 同上 p.106

³²² 同上 p.106

民の現行の自治の充実はあるべくして当然の結果なのかもしれない。しかし、その自治モデルに至るまでの過程において、諸々の権利取得を可能にした名誉の遺産を守り抜く為に多くの犠牲者の血が流れていることも我々は忘れてはならない。職人闘争の歴史を超えて尚、守り継がれてきた職人の「榮譽」は彼らの血と涙の結晶であることを十分念頭に置いた上でなければ、現代ドイツが受け継いだ遺産を正当に評価することはできないのである。

以上、ラトウーシュの描く自給自足の経済システムについてであるが、このようなシステムを現行のグローバル経済の下で完全（完璧）に機能させるには（フェアトレードも含め）、時間や一定の条件（地理的など）、そして何より住民や消費者一人一人の意識改革が必要であり、現実的に考えても現段階においては未だ理想論の域を出ないと言えなくもない。併せてドイツの地域力の成果については今後もドイツの国政や社会状況を引き続き観察する必要があるが、少なくとも今の時点で言えることはドイツの地域自治が高度に機能しているという確かな事実である。そして、地域住民を中心とする内外多方面に連携した地域社会（コミュニティ）の確立こそが、地域力を生む源泉となっていることは先程挙げた田中氏の引用からも明らかである。

<E.デュルケームの共同体に関する論考より>

この論文を締めくくるにあたって、フランスの社会学者、エミール・デュルケーム（Emile Durkheim 1858-1917）の論考を紹介して、今後の地域力、共同体の将来性についての考察を加える。デュルケームによれば、人は孤立無援で生存することが難しい性であり、生きる為に何かしら他の存在（人間）との関係を必要とし、強く希求する社会的生き物であるという。そこで自然発生的に集団が形成され、そこには集団を維持する為に必然的に道徳性が生まれる。しかしその道徳性の中に利権を巡る力関係などの利己主義（エゴイズム）が介在すると、その集団は早晚必ずと言ってよい程に崩壊するのだという。それはかつて栄華を誇ったローマ帝国とそれに付随するコミュニティ（職業集団を含む）の瓦解が如実に語るように、今も繰り返される歴史的事実がそのことを明確に示している。

更にデュルケームは、歴史に於ける文明社会の崩壊に至るプロセス（過程）は、長い目で見れば、「有機体全体に影響する全身にわたる疾患となる」³²³と述べている。つまり、崩壊とそのプロセスの影響は限られた一地域に止まるものではなく「有機体全体」すなわち「社会体」³²⁴に及ぶというのである。つまり、社会を「生き物」

³²³ E.デュルケーム p.25

³²⁴ 同上 p.25

＝「有機体」として捉えた場合、文明社会を崩壊に至らせるプロセスの根本原因である「共同生活の正常な機能にとって必要な諸器官の全体系〔…〕（の）構成上のこのような欠陥」³²⁵は「社会体」＝「有機体全体」の生命維持機能に影響を及ぼす疾患を意味するものであると解釈できる。これは「愛我心」が引き寄せる自我の中の神の箇所を取り上げたヘッセの「第二の高い、聖なる自我（インド人がブラーマ即ち梵天と同等のものに見なしているアトマン即ち真我）は、個人的なものではなくて、神へ、生命へ、全体へ、非個人的、超個人的なものへの我々の参与である」または、「各人みな、人間に向かっての自然の一投である。われわれすべてのものの出所、すなわち母は共通である。われわれはみんな同じ深淵からでているのだ」の部分にも重なる。つまり、社会を社会的組織としての有機体としてみることに以前に、社会体とは生物としての有機体から成る有機体（人類）の集まりであることは自明である。そうすると、生物的有機体で構成される社会体も元を正せば生物的有機体であり、人類や他の生物（自然）と同様に同じ深淵と繋がっているのであって、社会体もお互いに切り離すことのできない関係性の中で生かされているということが言える。それゆえに一部の社会体の崩壊は有機体の傷や痛みと同様にその一部だけに止まらず、繋がりのある総て、すなわち社会体全体、そして有機体全体に影響を及ぼすのである。そのことは長い目で見れば一部の社会的影響は繋がりが合う総ての関係性の隅々にまで伝搬して行き、最終的に繋がりを持つ社会体全体の一つ一つを形成する個々の有機体の生命維持そのものに影響を与えるということである（逆説的に言えば、良い影響も同じ過程にあるということである）。

また、集団を包括するものは最終的に国家であるが、国家がその国民、つまり諸個人を統括する場合に小さな国家の場合は国家と諸個人との結びつきはそれ程困難さを伴わないかもしれないが、国家が大きくなればなる程、実際には国家と諸個人間の関係に物理的（距離）かつ非物理的（心理的）距離が生じてくる。しかも双方の関係は「外在的、断続的にすぎる」³²⁶ので、継続して関係を保ち続けるには様々な困難（物理的にも心理的にも）が生じることは想像に難くない。そこで、デュルケームは国家と個人を結びつける中間的な「第二次的諸器官」³²⁷（有機体の「器官」、つまり機関を表す）の必要性を強調する。その「第二次的諸器官」として、著書『社会分業論』の序文で論証が重ねられているのが「職業集団」、または「同業組合」である。これらの集団は家族的機能を持たせることが可能であり、人生のサイクルを維持する為に人間の生活に必要な器官として、永久的に存続可能な必要条件を満たすものであるとデュルケームは主張する。

³²⁵ E.デュルケーム p.25、（ ）内は本論文著者による。

³²⁶ 同上 p.24

³²⁷ 同上 p.21

そもそも同業組合は一度、古代ローマの崩壊と共に消滅するが、中世の時代に再び息を吹き返し、13世紀には見事に再生を遂げ³²⁸、その後も様々な変遷を辿りながらも生き長らえてきた。その理由としてデュルケームは同業組合が、人々の「持続的で深刻な欲求に応じてきたから」³²⁹だという、一般的に、国家の従属関係にあった職業団体の旧体制に於ける、功利的動機による成員たちや団体の結びつき、または親方を含む団体の権力者たちの「特権と独占」³³⁰にこだわる姿が人々の記憶に刻み込まれており、今なお中世からの同業組合に対する疑念のイメージが定着している要因となっている。しかしデュルケームによれば、たとえ団体の長が特権や独占を擁護する為に成員に準則を強いても、規則は必ず墮するものであるという。それにも拘らずなおも成員の弱みに付け込んで強引に準則を強要したとしても、準則で縛られた見せかけの忠誠心は実質を伴わないどころか、思考を超えた無意識の領域で生じる（無理強いに対する）不信の念、それら深層心理の動揺が表層の思考や（顕在）意識を無視して及ぼす影響により、成員の仕事や成果に悪影響を及ぼし、チームワークに乱れが生じた組織や集団が内側から瓦解していくのを理解するのは容易である。しかし、規則を時代の変化に応じて改善し、職業的廉直を目的とした良識に基づく一貫した精神の下では、個人の功利を越えて集団への帰属意識を高め、集団の功利に対しての忠誠心を高めることに繋がる。この一連の流れを支えるものが集団から生まれる道徳性となる。しかも「私的効用を共同効用に従属させることは、それが何であるかにかかわらず、つねにある道徳的性質を帯びる」、「この従属には、必然的にある犠牲と献身の精神が含まれている」³³¹ことからして、このような道徳的性質にエゴイズムが介入することはないように思われる。

しかし、一見して判断することが難しいカモフラージュされたエゴイズムの介入に対してはどうであるか。その場合の功利の向かう方向は団体の成員総てに及ぶのではなく、必然的に団体や団体を取り巻く内外の一部の人間など、ごく限られた特定の狭い領域に絞られる為、幾ら取り繕うとも集団の功利が得られないものである限り遅かれ早かれ必ずどこかからほころびが生じ、成員がすべての犠牲と献身の精神を維持して行く為の団結に亀裂が生じる。つまり、集団にとっての功利とは集団の道徳性と共存し得るものであり、その道徳的性質からエゴイズムが排除されていなければ集団そのものが存続できないものである。このことから道徳的性質とはエゴイズムが介入せず、常に普遍性をもって社会一般に根付くものでなければならぬことが理解できる。このような現象から考えると集団の道徳的性質も基本は、ヘッセのいう「愛我心」が重要になるのではないかと推測することができる。――但し、

³²⁸ E.デュルケーム p.8

³²⁹ 同上 p.8

³³⁰ 同上 p.9

³³¹ 同上 p.11

ヘッセは、人間の個人は「愛我心」の探求において道德に闇雲に従ってはならないとし、「道德に服従する人間は人柄が貧しくなる」³³²とまでいっている。また、「ある人がこの道を行ったからといって、混沌を自身の内へ受け入れれば、原衝動に掛かりあえば、道德と縁を切れれば、いずれそのうちより良い、より真の、より高い道德や生の秩序が見つかるとは全然きまっていない！」³³³とも述べている。しかしこれは道德全てを否定している訳ではなく、個人の「愛我心」を語る上での限定した解釈ではないかと思われる。そこで、ここでは敢えて集団が自ずと道德性を帯びる状態を「道德的性質」と表現して、個人に向けられる「人の道」としての道德と分けて考えることでヘッセの主張との矛盾を解消する——例えば、「集団というものは、その成員の生活を牛耳る道德的権威だけではないのである。その生活そのものの源泉なのである」³³⁴とデュルケームも述べており、道德による準則の落とし穴（このことは前のヘッセの主張と符合する、つまり集団に必要な道德的性質と個人の思想に課される道德は分けて考える必要があり、この両者が混同して道德的性質が個人の思想まで侵しかねない場合の危険性を指摘したものと考えられる）についての理論を裏付けているのであるが、特に中でも「生活そのものの源泉」になり得るものは生命の問題に直結せざるを得ないことから、必然的に誰しものが「愛我心」に向き合う必要が出てくるからである。

この道德的性質に関してはヘッセも、人間の内面は本来、根源的な衝動である（生きる為の基礎でもある）自己愛が中心にあるが故に、隣人愛をこれ（自己愛）と同じように上手く成長させることができず、人間がそのことを隠し体裁を取り繕う為に作為的に作り上げた隣人愛のシステム、「他人を愛することは、自分自身を愛するよりも善く、いっそう倫理的でいっそう気高い」³³⁵という、本来ある自己愛に仮面をかぶせて「奇妙な言葉の原義を転義するシステム、上べの体裁を繕うシステム」³³⁶を成立させたという。それにより、

〔…〕 家族、種族、村、宗教的共同体、民族、国家が神聖なものとなった。自分自身のためには最小の倫理的な掟すら破ってはならない人間が——共同体と民族と祖国のためには何をしてもよく、最も恐ろしいことを行ってもよいのだ。そして普通は忌避されているどんな衝動も、ここでは義務となり英雄精神となる。人類は今日までにここまで到り着いてしまった。³³⁷

³³² 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第2巻）』 p.13

³³³ 同上 p.34

³³⁴ 同上 p.22

³³⁵ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第5巻）』 p.276

³³⁶ 同上 p.276

³³⁷ 同上 p.276

と「隣人愛」という一つの道徳性を例に挙げ、その社会に於ける偏った解釈による道徳観の一方的な暴走が人々に及ぼす危険性を警告している。このことから、「道徳的性質」の成否は「愛我心」により精査され、個人の「道徳」の領域への不正な侵犯を常に警戒しなければならないのである。また、ヘッセはそれとは反対に個人の「道徳」が集団の「道徳的性質」に及ぼす危険性も指摘している。

若者たちよ、君たちの口にする言葉の中には、私をたやすく——いっそ笑ってしまうのでもなければだが——うんざりさせるものがある！それは世界改良という言葉だ。

〔…〕世界がよいか悪いかの判断を控えることを学ぶべきだ。そして、世界を改良するというこの奇妙な要求を断念するべきだ。³³⁸

世界は改良されるためにあるのではない。君たちもまた改良されるために存在しているのではない。そうではなく、君たちは君たち自身であるために存在している。

〔…〕自らの利己主義を恥ずかしく思い始めるとき、人間は世界改良を口にし、そのような言葉の背後に身を隠し始めるのだ。³³⁹

このように、個人の「道徳」を集団の「道徳的性質」に安易に組み込もうとすることについての危険性を指摘している。

そしてデュルケームの指摘にあるように、集団のみならず、牛耳ろうという意図を持つ存在に普遍性を満たす道徳的権威がないことは勿論同意するが、なくてもある振りをするのが人間の性である。しかしその性に従って道徳的権威を装おうとしても、結果的に集団の功利が得られるかどうかは遅かれ早かれ必ず露見するものであり、「愛我心」をもって真実に寄り添った視点に立つ者はその普遍性の矛盾をさまざま指摘するのである。

デュルケームは、国家による集団への規制作用は近代 17～18 世紀のような窮屈な隷属関係に墮してはならないとし、「自律的」³⁴⁰でなければならないとする。それは、国家の一般原則では複雑多様な産業の機能を制限することができないからであると理由を述べている。つまり集団或いは団体のこのような多様化の芽を摘むことは集団、団体の道徳性の改善を滞らせ、これら組織の瓦解を招く危険性がある。

³³⁸ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第8巻）』 p.174

³³⁹ 同上 p.175

³⁴⁰ E.デュルケーム p.21

そのこと（瓦解）は即ち、器官（第二次的諸器官）の消滅を意味し、先述の通り、「一部の社会体の崩壊は有機体の傷や痛みと同様にその一部だけに止まらず、繋がりのある総て、すなわち社会体全体、そして有機体全体に影響を及ぼすのである」、或いは「一部の社会的影響は繋がり合う総ての関係性の隅々にまで伝搬して行き、最終的に繋がりを持つ総ての社会体の一つ一つを形成する個々の有機体の生命維持そのものに影響を与える」のであるから、集団（団体）や器官の崩壊は地域の崩壊を招き、その傷や痛みは地域外にも伝搬していき、果ては地球上の隅々にまで広がりそこに存在する有機体全体の疾患となるのである。特に昨今はグローバル化の影響で地球上のあらゆる地域がより接近し相互に繋がりを強めてきている為、この影響は益々顕著になることが考えられる。デュルケームはまた、

〔…〕国がみずからを意識するのに職業によって結集しなければならないということは、組織化された職業または同業組合が公的生活の本質的器官であるべきだということを、認めることではなかろうか。³⁴¹

と職業組織や同業組合の公的生活に於ける重要性を指摘する。

また、多様化が道徳を改善することに関してはデュルケームが

多数の、また多様な要素から形成された集団においては、たえず再編成が生じ、それだけ新しいものが生まれる源泉ともなる。だから、こうした組織の均衡は固さがとれ、したがって、欲求と理念との動的均衡もおのずから調和がとれるであろう。³⁴²

と述べていることから、集団の多様化はメリットが大きいとみられる。この点からもデュルケームは、地域の繋がりが限定的なものから開放的なものへと推移していくことのプラスの可能性を示唆している。つまり組織というものは従来 of 体制に更新の必要が生じた場合に、伝統や組織の慣習に（がんじがらめに）縛られずに時代や社会の流れに沿って再編成可能な体制を持つべきであり、更新を必要とする際の道徳性が集団内の限られた狭い範囲の功利だけに留まるものではなく、社会的普遍性にも沿い、更には長期的視野に立って社会的功利にも貢献するものであれば、その更新に伴う再編成は正しい選択であると考えられる。但し、多様化による再編成が意味することは、多様な思考や意見による再編成であることは言うまでもなく、逆に閉鎖性や異質な思考、意見を排除する動きは再編成の障害となる。むしろ積極

³⁴¹ E.デュルケーム p.24

³⁴² 同上 p.22

的に外部へ開放することで様々な思考や意見を参考にする過程において、必要ならば現状や時代の変化にあった適切な変更を取り入れていくということが重要である。

多数の異なった考えの中で一つの選択をすることは困難なことであるが、成員の個々が自律した状態においてそれぞれの持つ「愛我心」を指針にして、異質性を排除せずに多様なアイデアをうまく取り入れていけば、健全な軌道修正が可能になり、結果の成敗はその選択をした集団自体が存続可能で且つ持続的繁栄が可能なのかどうか判断の基準となるであろう。そして、その選択が社会有機体の全身にわたる疾患を癒し、全体を健やかで健全な状態に導いていくものであるならば、その組織、集団は間違いなく永遠に繁栄するものとなるのである。

<再び「細分化された個体を全体へ」の試み>

個体（個人）と全体との関係において、エゴイズムは早晚どのような共同体も破壊し得ることを考えると共同体を永遠に持続させていくにはエゴイズムを排除し、成員一人一人が「愛我心」を指針にしながら方向修正を加えつつ共同体を運営していくことが必要になると考えられる。エゴイズムを排除することのメリットについては、ヘッセもこのように説明している。

要するに、どんなにささやかなものであっても、こちらからなにがしかの愛と思いやりを注いでやれば、喜びと生きる気力で報いてくれるものなのだ。ところが私たちのほとんどは、愛と関心のすべてを、失望と老いの早い訪れという報いしかもたらさない金へと振り向けてしまっている。私欲を捨てたほんの些細な献身、思いやり、愛はどれも私たちを豊かにするが、一方、財産と権力を求める努力はどのようなものでも、私たちからエネルギーを奪い私たちを貧しくしてしまう。これはすべての時代の人生訓の不思議で簡単な神秘だ。³⁴³

更に、こうも結論づけている。

〔…〕最高の喜びを与えてくれるのは権力でも財産でも知識でもなく唯一愛だけだというのが、どこにあっても究極の英知なのだ。無私の状態、愛情からなされる断念、行動をともなった同情、自己を投げうつ行為、これらはどれも手放すことであり諦めることのように見えるが、それでもやはり豊かになることでありより偉大になることであって、前へそして高みへと続く唯一の道なのだ。

³⁴³ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第5巻）』 p.107

これは古くからのおきまりの歌であり、そして私は下手な歌い手で説教者だ。
しかし真実は色褪せることはなく、砂漠で説かれようが、詩に歌われようが、
また新聞に印刷されようが、それは常にそしてどこにあっても真実なのだ。³⁴⁴

ヘッセの言葉をそのまま集団に当てはめて、エゴイズムの介入は共同体を本質的に貧しくし、反対にエゴイズムを排除することはその共同体に本質（特に精神）的な豊かさをもたらすことに繋がるということになるだろうか。「無私の状態」、「自己を投げうつ行為」は集団や個人のエゴイズムに従うものでないことは既述でも明らかにしており、「愛我心」において真我（個人の持つ全ての利己的エゴイズムと対局に位置する第二の高い自我）に従うことを基本姿勢とすることと矛盾しない。

また、デュルケームの指摘にもあったが、個体と全体を別の角度からみたときに、共同体というものに依存しなくても生存可能な個体、人間がこの世に存在するのかわという点から考えてみても、生きている限り血縁や地縁は必ず生じるものであり、共同体と一切関わることなく生きていくことは絶対的に不可能である。このことから、「愛我心」はこの世に生を受けたあらゆる個々人の生命維持に必要不可欠なものといえるのかもしれない。つまり細分化された個々の「愛我心」は、共同体の誤った方向への暴走を修正しながらその体制を健全な状態に維持していく為の気付きを与え、その気付きによって更新、再編成される共同体は健全性を保ち、その健全な共同体が属する地域の地域力を豊かに、或いは持続させる術を提供し、そのことが結果的に有機体全体（社会体）を健全な状態にし、有機体を構成する個々人、一人残らず総ての生命、そしてそれのみならず全ての地球上の生命をも維持、継続させる方向へ導くと考えられるのである。

ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）を始め、人と人とが物理的な場の概念を超えて様々な手段で結ばれるようになった昨今、このような種々のネットワークのシステムをデュルケームがいう多様化を取り入れる為の一つの手段として利用することも可能となった。ラトウーシュも、「各人が問題に臨機応変に対応し、プリコラージュ（寄せ集めの前作業）を行い、困難を切り抜けるその方法はネットワークに依存する。互いに繋がっている者同士が様々な社会関係の群れを形成するのである」³⁴⁵と述べているように、「様々な社会関係の群れ」の形成はあらゆるネットワークを介して（距離を超えて）可能となり、またそうした群れ同士の接触はそれぞれの集団の多様化を促進し、問題を解決する為の柔軟な思考を提示する。

しかし、ラトウーシュは同時に「無数の非営利アソシエーション（少なくとも完

³⁴⁴ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第5巻）』 p.108

³⁴⁵ S.ラトウーシュ p.116、（ ）内は本論文著者による。

全には営利目的ではない協同組織)」³⁴⁶について、「[...] これらの組織は明らかに統一された動きをもたらしてはいない」³⁴⁷とした上で、

経済開発とグローバル市場に接合され、これらの共同組織（種々の非営利の協同組合）³⁴⁸は遅かれ早かれ消え失せるか、あるいは支配的なシステムに根を下ろしてしまうことを余儀なくされる。そのときアソシエーション運動は文字通り自らの魂を失い、公権力・企業およびアソシエーションの正規職員の手によって、そして（経験や有意義な学習を求めて）アソシエーションのためにボランティアで働く「戦闘的活動家たち」の手によって「道具化」されることで終わってしまう。³⁴⁹

ことへの懸念を挙げている。グローバリゼーションに伴い自由主義経済や多国籍化の流れが加速する中で、ネットワーク社会と繋がることにより多様性のメリットは享受しつつも、「経済開発とグローバル市場」³⁵⁰の席卷からローカルな共同組織を如何に守っていくかということは今後の重要な課題となってくる。

しかもラトウーシュは、「ローカルな社会を成功させる」³⁵¹ことは、「ミクロな次元での経済発展」³⁵²を目指すことではなく、「もう一つの社会を建設するプロジェクトに参画するもの」³⁵³であり、つまりは「地域の有機的な再編への回帰」³⁵⁴を意味するものとした上で、そのことは即ち『反開発』もしくは『脱開発／脱発展』³⁵⁵なのだ、と主張する。また、「地域は閉鎖的な小宇宙ではなく、経済自由主義の支配への抵抗を可能にするような、民主主義を強化する諸実験（例えば参加型予算）を試みるための、有徳性と連帯感をともなう横断的な様々な関係のネットワークにおける一つの結節点である」³⁵⁶とも述べている。

ヘッセの小説に登場する職人は遍歴を通じて自律し、職人としての自立の道を歩み、その後故郷または落ち着いた先で再び地域に根付き、それまで遍歴で得た知識や情報、経験を生かして地域共同体のコミュニティ・マネージメントに、中心的、或いは縁の下の力持ちとして関わって来た。中世から近代にかけてのドイツの地域

³⁴⁶ S.ラトウーシュ p.119

³⁴⁷ 同上 pp.119-20

³⁴⁸ () 内は本論文著者による。

³⁴⁹ S.ラトウーシュ p.120

³⁵⁰ 同上 p.120

³⁵¹ 同上 p.120

³⁵² 同上 p.120

³⁵³ 同上 p.120

³⁵⁴ 同上 p.190

³⁵⁵ 同上 p.120

³⁵⁶ 同上 p.190

の産業や自治はそれら職人や商人、地域住民による営利、非営利の活動によって支えられていたといえる。このような地域に於ける自給自足で長く繁栄した中世の産業、そして経済の持続性からみる限りにおいても、地域社会のコミュニティと結びついた経済循環こそ社会全体の持続可能性をもたらすのかもしれない。「中世の産業革命」やドイツの地域共同体にみられるように、地域住民を中心とした（住民の格差を超えた）地域社会（コミュニティ、共同体）の創造（建設）こそ現代の諸問題を克服し、持続型社会の構築を可能にすると言えるのではないか。

職人の遍歴は現在のドイツの職業教育システムに置き換わったが、遍歴を通して得た国内外の知識や情報は今や、書籍以外にも多種メディアや通信機器の発達、取分け昨今はインターネットなどのネットワークを通してもある程度得ることが可能になってきている。遍歴を通して自律した職人が、再び故郷または落ち着いた先で職人として自立し再び地域に根付いて、遍歴で得た知識や情報、経験を地域共同体のコミュニティ・マネジメントに還元した一連のサイクルが、今は地域や社会の現実のコミュニティ（共同体）にしっかりと軸足を置きながらもネットワークで外部とつながることで可能となりつつある。自給自足型の地域の経済循環を基本とし、ネットワークを上手に活用しながら共同体またはコミュニティの活動を周囲に広げていくこともこれから期待されよう。

このように地域コミュニティや共同体を舞台として、ヘッセが職人の作品などの執筆を通して最終的に理想として思い描いた、政治や宗教を超えて「愛我心」に支えられ、「個性化により細分化した個体（個人）」が地域コミュニティや共同体において思わぬ形で新たな役割を得ることも、今や非現実的なことではないのかもしれない。

<結び>

20世紀後半になってから、様々な形でヘッセの作品集や選集がドイツ国内で出版され、その中からベストセラーも出るなど、この再燃現象はヘッセ・ルネサンスともいわれているようで、日本でもその翻訳本が相次いで刊行されている³⁵⁷。その後も21世紀に入ってからドイツに続き日本でもその翻訳本が相次いで刊行されるなど、それまで埋もれていた作品が再び日の目を見る中、ヘッセが語り継ごうとした遺産は確実に現代に引き継がれているといえる。ヘッセが伝えようとしていたメッセージを如何にくみ取るかが我々に課せられた課題であると同時に、我々は学問としての文学という手段を通して作品の素晴らしさのみならず、作品に込められた作

³⁵⁷ 『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集（第1巻）』 p.309

家の想いや遺志を知り、後世にその価値や意義を伝えていかなければならないのではないかと思わずにはいられない。その意味でヘッセの文学は職人の文学を描くことを通してドイツのみならず人類にとって大切な文化的、精神的遺産を残し、今後その遺志はドイツ国内だけに留まらず、世界に連なる多くの後世の人々へと受け継がれていくのである。